

パレスチナ芸術を用いた対話的鑑賞法の実践 ——ICTを活用した対話型遠隔学習の教育デザインの観点から——

佐々木 陽 子

1. はじめに

本研究は、名古屋市にある私学、南山大学の大学生を対象に、地域研究の一側面としてパレスチナ・イスラエルの間で作成された対話発信の諸相としての芸術に着目し、現地の諸相を理解するための芸術作品の鑑賞を織り込んだ教育実践を設計して実施したうえ、その教育設計について考察することにより、資料の質についての議論を深めると同時に、対話の回路として芸術の役割について考察するものである。

1-1 他者理解のための資料

アジアをはじめ国際社会と共に生きる将来を一層強く意識していく方向に舵を切った日本経済と、日本社会内部においては、「グローバル人材育成」という課題はもはや選択の余地のない必須の課題である。この課題は従来長らく認められてきたものの、これまでは主に海外渡航する訪問側の視点から重視されてきており、従ってその手法や発想も、欧米型の適応的な異文化コミュニケーション能力の育成が主であった。

一方、グローバル・ヒストリーという用語や内容が徐々に注目を集めるなかで、歴史学習や政治学習によって年号や出来事は知っていても、それを現地の目線で理解するということが難しいという問題が指摘されてきた。歴史を能動的な読解資料の所作として組み立てなおす必要がある。さらに中東問題についてはなおのこと、身近な問題として接近して考えることが困難であり、遠いところの大変な人々というイメージが強く、そのために誤ったり偏ったりした情報に吸い付けられることもしばしば起きるため、自発的学習のみに依存すると玉石混交の情報を取捨選択することがうまくできないという問題があった。したがってパレスチナに関する歴史を踏まえた現地社会の理解を行うにあたっては、複層的な困難が存在することになる。その際、際立って重要視されるのが「資料」の質である。

パレスチナ問題に関していえば、そこでの「イスラエル入植地」がしばしば話題性をもって報道されるが、カギとなる概念である「植民／入植」という概念を学ぶ際に、どのような具体的資料があるだろうか。年代、数値といった数値資料として例えば「1967年時点で、ゴラン高原に44入植地、ヨルダン川西岸地区に246入植地、ガザ地区に33入植地が建設された」とする。この数値に重ねて、地図情報が加わると、数値は一定の可視化を遂げる。図1のように、それぞれの入植地の名前や点

在の様子といった、より視覚的かつ俯瞰的情報を伝え、入植の包括的な把握が可能となる。

個別に流れるニュースは、その背景の事実を知ることによって深い意味を読み取られる資料となる。例えば「イスラエル議会が、新たな入植地の建設を決定しました、パレスチナの住民はこの決定に反発しています」などという報道が、人々の暮らしや影響のレベルにおいて、どのような意味を持つかについて考えるためには、「占領しているパレスチナ領土内に、イスラエル政府が、新しく入植地を作る」という事実そのものの意味を、より具体性をもって知らねばならない。

そのような質的理解を行うためには、まず「入植地」の質についての理解を行わねばならない。入植地（Settlement）がどういう規模で建設され、「安全を確保する」という名目のためにその周囲がどの程度の広さにわたり領土的に接収されるのか、それがさらにフェンスで覆われたり壁で守られたりすることで立ち入りが不能になる地帯が保たれ交通が遮断されれば、結果として現地の人々にどのような影響が加わるか、ということを示すためには、入植地の規模情報や、周辺道路やフェンス、壁の様子を伝える情報など、様々な資料が必要となる。こうした、数値化されない質を伝えるうえで、図2のような写真情報も有用である。



図2 Har Homa : Israeli Settlement in the Territories Occupied Palestine [筆者
撮影 2010年3月 パレスチナ自治区]

さらに、入植が、入植者の暮らしとともに、入植で土地や家屋を破壊され立ち退きを強いられ、あるいはインフラにおける制限を加えられる被入植側の生活者にどのような関係性を作るか、歴史の想起やアイデンティティの問題など、さらに細やかな部分にまで迫るためには、図3のような芸術作品もまた読み取っていかねばならない。

こうして考えると、政治経済を含む社会の実態や、人々への影響を伝えるためには、事実をいかに提示するかという点において、「他者」を可視化するための教育工学的な資料の検討が重要になる。様々な資料はこうして、「他者」の政治的な声を可視化する目的で検討される。



図3 Illegal Israeli settlements and misappropriation of Palestine land
[al-Ali 2009 : 14]

1-2 「人の和解」に資する対話的な資料

平和学においては、平和・安全保障問題が国家主体で遂行されていった結果、難民などの国家の枠組みから周辺化された人々の安全がむしろないがしろにされていくことに着目し、国家の安全とは異なる視点から「人間の安全保障」という概念が打ち出された。これによって、「国家の安全保障」で取りこぼされる事象を補完していったことが、平和学の範囲を大きく広げただけでなく、質を向上させる結果となった。「人間の安全保障」という概念が生まれ、補完的役割を見込まれた経緯は、紛争後の「和解」について考える際にも、大いに参考になるものである。

とりわけ紛争後の「和解」は、戦争の真実究明と補償など国家主体の面が強く、主に政治学などによる「国家の和解」が重視されてきた。その結果、和解を考える場合にもまた、国家主義や集団主義的を強める傾向が引き継がれ、集団アイデンティティを特化させた形で進められがちである。個々人の内面における記憶の継承や、対話、さらに内的ダイアローグは軽視されやすく、そのことが紛争後の和解の障壁となってきた。「人の和解」を考えるとときにこそ、国家と軌を一にしない様々な記憶と継承、社会アイデンティティの再編など、多くの内的過程が存在するはずである。人文学研究では、とりわけ細やかな和解についてより強い関心を持って研究を行わねばならない。

このような視点から本研究では、ともすれば国家の枠組みでとらえられがちである紛争後の和解に関して、「人間の和解」という点から問い直すことを重視するという発想を基調としている。この基調に沿って、人と人の出会いの契機として、感情と対話を喚起する「芸術」の現場に注目したことが、本論で扱う教育設計の基礎をなしている。

1-3 本論の構成

本論では、まず能動的な読解のための「資料」として芸術が注目されるに至った経緯や理論的背

景を分析する。次に異文化接触の諸相を扱う教育講座においてパレスチナ芸術を取り扱った教育実践の概要として用いた資料の分析を行い、その学習デザインの資料的意義を分析する。最後に、学生から得られたフィードバックを類型として提示することで ICT を用いた遠隔学習における対話的異文化接触教育についての実践効果を概観する試みを行う。これらによって、フィールドワークや直接的な対話活動が制限される中で、芸術との対話的鑑賞を軸にした今後の異文化接触や国際交流教育の設計への一助となることを目指すものである。

2 教育工学的観点から見た「資料」の意義

2-1 「資料」を読み取る社会科・歴史学習の流れ

昨今では多くの企業の採用選考で資料読み取り型の GD（グループディスカッション）が実施されているといわれる。歴史学習の場面においては、多様な資料の読み取りは、かなり以前より奨励されているものであって、なかでも「風刺画」は社会科教育の中で教育利用が注目されてきた資料であった。したがって社会科教育に関しては、図画や資料の読み取りを組み込んだ教育に関する先行研究も充実しており、対比・象徴など資料の読み解き作業の重要性〔岡本 2007〕を調べた研究や、書き手の意図に焦点を合わせて解釈させる教育研究〔田中 2010〕、風刺画を修正させる教育の研究〔西牟田 2000〕など、歴史教育の現場では「解釈」や「資料読み取り」の力を形成する目的で、絵画（風刺画）等の作品資料が用いられることも多々あり、その使用法が議論されてきたことがわかる。図 4 のような戯画や風刺画は、その史実を視覚化した図画そのものと同時に、その読者が当時誰であったか、どのような局面と意図が背後にあって発信されたか、その受け止めはどうであったかなど、細やかな情報の流れを読み取るための、格好の素材であった。



図 4 China - the Cake of Kings
〔Meyer 1889〕

2017 (H29) 年の新学習指導要領社会科では、「年表や絵画など資料の特性に留意した読み取り方についても指導する」という文言が新たに加えられている〔文部科学省 2019〕。文部科学省教育課程部会 高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム (第 5 回) 参考資料 4-1「社会, 地理歴史, 公民における思考力, 判断力, 表現力等の育成イメージ (案) 他」によれば, 情報を収集し, 読み取り, まとめる能力 (同 2 頁) が重視されその結果, 社会事象に関する「知識技能の習得」, 社会事象についての「思考・判断・表現」の獲得, そして「社会事象に主体的にかかわろうとする態度」という三項目が, 評価観点 (同 5 頁) として掲げられている。さらに 2022 (R4) 年からの高校の授業に, 日本史・東洋史・西洋史という区分を見直して新設された科目「歴史総合」が導入されることとなり, これを機に学び方の質に対する見直しが始まっている。この新科目は 1947 年の戦後の教育改革以来, 歴史に関する初めての設定である。このような流れから, 昨今再び, 「問い」と「資料」で組み立てる学習が注目を浴びつつある。

この「資料」には, 絵画や年表, 地図, 歴史地図, 統計, 文章 (文献) に加え, 自ら観察・調査し収集したデータなど様々な種類がある。『社会科教育指導用語辞典』〔大森ら 1993〕は, 資料の活用方を次のように定義づけている。

- ① 学習問題を分析した上で, 解決を引き出すために必要な資料を収集する力 (収集する力)
- ② 資料が示す事実およびその背景まで考えながら読み取る力 (正しく読み取る力)
- ③ 資料にある社会的事象を総合し, 論拠としての資料を選択する力 (選択する力)
- ④ 資料を用いて結論を吟味したり概念化したり, 新たに应用したりする力 (再構成する力)。

このような形で「資料」を読み取る作業を行えば, 暗記科目と考えられがちな社会科目は質的に大きく変化するだろう。読み取る主体である学習者が資料との対話的再構築を行うことで, 資料の意味を発見し, 構築し提示発信する力へと学びの成果も変えていくこととなると期待される。

2-2 対話的芸術鑑賞から影響を受けた学力「生きる力」の重視

こうした「読み取り」の力を鑑賞者に求める, もう一つの流れに「対話的芸術鑑賞」があげられる。ニューヨーク近代美術館で 1984 年から 1996 年までギャラリー・トークなどの教育プログラムに従事し, 「視覚を用いて考えるためのカリキュラム」(The Visual Thinking Curriculum) 作成に参加したアメリア・アレナス (Arenas, Amelia) が提唱した「対話的な鑑賞法」(Dialogical Appreciation) に端緒があるとされるのが, この対話的鑑賞法である。芸術を対話的に利用するという発想は, 今では多くの博物館や美術館で取り入れられている。「対話的芸術鑑賞」の日本国内での広がりについて, 森 (2020) は次のように説明している。

日本では 98 年の著書『なぜ, これがアートなの?』(淡交社) の出版や, 98 年から 99 年にかけて豊田市美術館, 川村記念美術館, 水戸芸術館現代美術センターとの共同企画により同名の展覧会が開催されたことで, 国内でも対話型鑑賞が注目を浴びることとなった。対話型鑑賞では, 美術作品を専門家による研究対象としてのみ捉えることを否定し, 作品の解釈や知識を鑑賞者に一方的に提供するような解説を行なうことをしない。鑑賞者が作品を観た時の感想を重視し, 想像力を喚起しながら他者とのコミュニケーションがなされることで, 組織化された対話や交流が可能となる。そこには, 作品を作者の経歴や美術史的考察によって価値づける既存の作品観や鑑賞法ではなく, 作品と鑑賞者のコミュニケーションを通じた関係によって意味が付加されるという「開かれた作品」としてのアレナス独自の作品観がうかがえる。

一方、日本では「新しい学力観」（1989 学習指導要領の改訂）に影響を与えた佐伯眸らが、未知なる美術作品を見るという状況に置かれた鑑賞者が、その意味を考えたり構成したりする作為として「対話による意味生成的な美術鑑賞」を早くから評価していた。のちにこのタイプの鑑賞力は、文部科学省が重視する「生きる力」を育成する教育指針へとつながっていったと上野（2012）は分析している。

「生きる力」とは、1996 年に文部省（現在の文部科学省）の中央教育審議会（中教審）が「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という諮問に対する第 1 次答申の中で記されたのを皮切りに、教育の新たな目的の一つとみなされるようになった力であり、その後、「総合的な学習の時間」を経て、2008 年 3 月の学習指導要領を改訂には「ゆとり」でも「詰め込み」でもないとしたうえで、『「生きる力」をはぐくむという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視しています。』と重視されるに至っている。

そこには「グローバル化の進展により、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争が加速するとともに、異なる文化との共存や国際協力の必要性が増大」しているとの分析を踏まえ、これからの社会を生きる子どもたちは、「自ら課題を発見し解決する力、コミュニケーション能力、物事を多様な観点から考察する力（クリティカル・シンキング）、様々な情報を取捨選択できる力」を求めると記述されている。〔文部科学省 初等中等教育局教育課程課 2011a〕

2-3 「厚い記述」としての質的記述を伴う資料

本稿で扱う教育設計においては、コロニアリズムの実態を理解することを重要な目的の一つとしており、コロニアリズムにかかわる様々な社会的アクターの視点から、社会の複雑さ重層性を認識することが必要である。

米国の文化人類学者であるクリフォード・ギアーツは、「厚い記述」（thick description）として、状況をまったく知らない人でもその行動がよく理解できるように、表面的な行動だけではなく、背後の文脈も含めて説明することの重要性を指摘している。彼が提唱した「厚い記述」とは、情報機器で収集記録されるような情報の量的積み重ねではなく、「関係性に根差した空気感」とでもいうような質的記述のことを指す。ギアーツは「文化はコンテキストであり、その中で社会事象、行動、制度などが理解できるように一つより厚く一記述されるもの」〔ギアーツ 1987〕と考え、「複雑な概念的構造の多重性」に直面し、それに関する解釈を行うことを重視していた。具体的な素材としてギアーツは、「人類学は著述、論文、講義、博物館の展示、……フィルムの中にも存在する」と述べていて、資料の幅広さを示すとともに、芸術作品を含む様々な資料の意義を認めている。

文化接触の諸相を示す「資料」を選定する際には、資料の質として、この「厚い記述」に相当する説明力ある資料が求められてくるだろう。今回の教育デザインにおいては、「厚い記述」に類する資料として、数値データや地理データに加えて、客観的データに容易に置換されえないような情報量と、背景やコンテキストを含んだ読み取りを促す資料としての芸術作品を重視して用いることとした。

3 ポストコロニアルを形成する公共圏と多声

先住市民が未承認の存在となったり副次的な地位にとどめられたりするうえ、識字を含む教育

課程から除外されるなど社会的発言権や発信の機会から除外されることの多いコロニアリズム下では、現地の生き生きとした声を聞き取ることは、決して容易ではない。コロニアリズムに関する議論を行うためには、「他者」が政治的に立ち現れるための場が必要である。コロニアリズムにまつわる「他者」の声を聴く、という資料を考察するにあたり、いったんここで公共圏について触れておきたい。

3-1 公共圏—政治的な他者が立ち現れる空間

ハーバマスは、近代の市民や貴族がコーヒーハウスやサロンや読書会において対等に議論し合うさまを、「公共圏」と呼んだ。さらに H. アーレントは、政治空間において我々がきちんと「現れ」ようになるためには、what「何」ではなく who「誰」として「眼差しを向けられる」必要があると述べている。実際はそこにいるのにあたかも他者がそこにはいないかのような全体主義的な状態を脱するには、他者それ自身の「現れ」が重要なのだ。「声なき声を聞く」や「存在の可視化」はこうした文脈で重視される。

齋藤純一（2008）は政治の条件を、政治的空間、公共空間において、各人がひとしく「眼差しを向けられ」立ち現れ、政治的人格を与えられた「全うな他者」として認識されることだと述べ、そのような場を公共圏であると説明している。

同質であることではじめて存在や発言を許されるのではなく、むしろそれとは逆に、政治的に異なる「他者として」万人が平等に政治的人格を獲得し、自らの言葉で語り得て、なおかつその声を聞き取られる場所として、「公共圏」が重視されてきた。

しかしながら自らの声をまだ持たず、あるいは持つための安全性を失い、政治的人格として扱われないまま多数派に付随した生を強いられる存在がいる。彼らの自尊心は政治的人格とともに失われ、公共空間から退出させられるか、多数派の目線と解釈に翻弄されることになる。

同時に人々は、他者としてではなく生としての存在そのものを承認される場を欲する。それが「親密圏」とされる領域である。当初は近代家族の領域とされた親密圏は、親しさと愛情を基盤とした「仲間」の領域を指すものとして拡大し、近年は「生の拠り所」として、公共圏の対抗領域、あるいは並立的公共圏、自由領域という意味合いも付与されている。

親密圏が同一価値観によって形成される身内の寄り集まりの場であるのに対し、「公共圏」には「他者」が存在する。その「他者」が政治性を持って立ち現れることが、公共圏の最大の特徴である。異なる価値観が表現されることによって、埋没しない「他者であること」が可視化されていく場であり、交差し合い、主張を闘わせあい、差異そのものの意味を確認し、そして創造が生まれる場が、公共圏である。同質ではなくても異質な人々の存在が承認され居場所を分け合うという発想に支えられる討議の場は、同時に、理性的な熟議をし得る政治主体であることを保証していく。

以上の公共圏に関する議論を踏まえ、公共圏が重層性を持っている点に留意して包括的な公共圏とその間での対話を図式化したのが次の図5である。

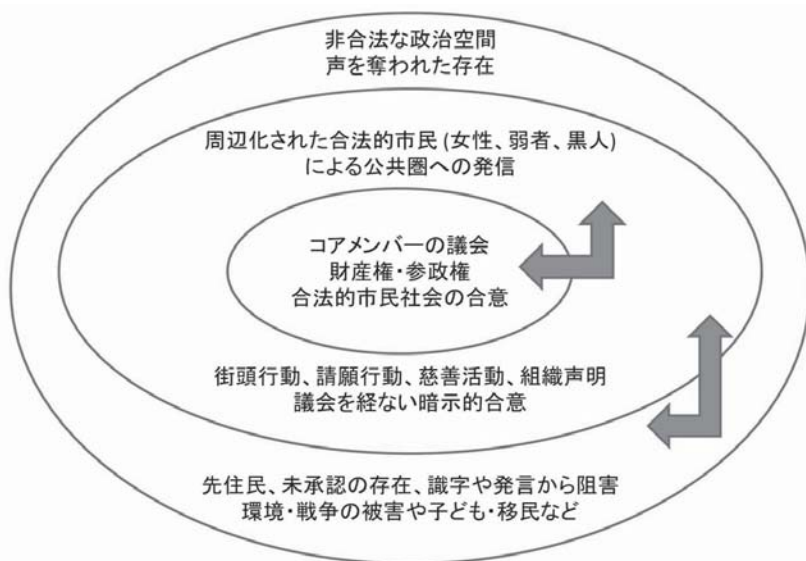


図5 包括的な公共圏と対話 [佐々木 2021 : 5]

教育的な場面での「資料」を整えることで公共圏を描き出すという際には、この図5にあるような重層的な公共圏を形成していくことを考慮する必要がある。

マイノリティの社会的状況を取り扱う場合、包括的な公共圏の全貌を網羅する資料情報を、報道や公式情報からのみ獲得することは非常に難しい。声なき声といわれる部分にまで光を当てる資料を求めるためには、細部にわたる「他者」の声を可視化していくことと、聞き取りにくい声を拾い上げることによって、それらに「他者」たる発話を促す「場」を設定しなければならない。

3-2 「公共圏に立ち現れる他者」としての芸術

イスラエルの軍事占領下のパレスチナ人の生活に着目した研究は多い。飛奈(2009)はそれらを概観し、多くが軍事占領という暴力そのものへの注目が強かったと指摘したうえで「占領の暴力性は軍事占領のみにあるのではない」と分析し、被占領社会への暴力的な「影響」を示すという点から、占領下の人々の生活そのものを描き出そうとするフィールド調査を行っている。

軍事占領の、いわゆる直接的暴力にのみ着目することで、逆に見失われる視点があることについては、パレスチナの民衆研究において特筆すべき点であると筆者も長らく考えてきた。社会構造や生活の多岐にわたる分野の中に、植民地主義による占領の影響は及んでいる。その影響と実態を包括的に把握することは、直接的な暴力があまりに顕在化した現地にあっては、フィールドワーカーやメディア従事者にとってさえも容易ではない。

同時に強調すべきは、文化芸術に着目した、文化的抵抗[佐々木 2020]という概念とその実態を理解することの重要性である。文化芸術というものは、軍事が破壊し奪おうとする人間らしさを根本的に守り、土地と共に歴史を紡いできた人々の営為を誇りをもって継承し、さらに創造しようとする基礎となるものである。占領地独特の「支配—被支配」関係の枠組みそのものを解体してい

くための視点や、現状をオルタナティブに再構築するための創造的な可能性を、文化芸術の中に見出すことができる。

一般に「ペンと剣より強し」という言葉があるが、これは、破壊する剣に対比して、文化芸術および学術の創造的な重要性を意味するものである。軍事占領政策への抵抗を文筆活動によって続けてきたエドワード・サイード (Said, Edward W.) や、風刺画によって現地の声を伝え続けたナージー・アル・アリー (Naji al-Ali) が描くこれらの表象 (図6) は、「ペン」が象徴する「描き出す力」「思考する力」「想像する力」としての文化芸術を用いて、彼らから見た社会の現状を直接、世界へ伝えようとする芸術の根本的な動機を示している。図6のように、表現力のペンを表象する言葉や作品が多く見られることは、パレスチナ芸術の一つの特徴であり、この静かな力強さは多くの芸術の基調をなすものである。

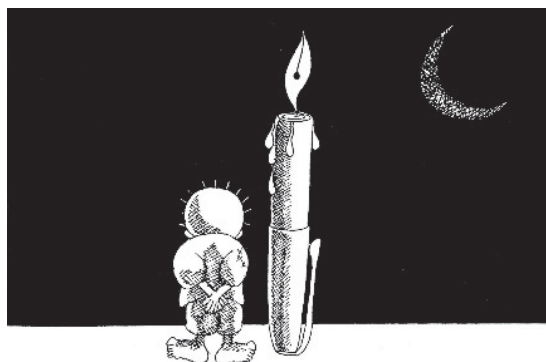
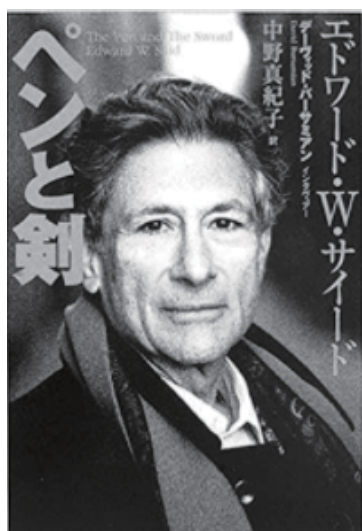


図6 パレスチナ文芸におけるペンと剣の表象 [Said 2005；表紙， al-Ali 2009；表紙]

3-3 パレスチナ芸術の特徴

パレスチナにおける芸術表現は、1948年に多数の難民とくに知識人が国外に脱出した際に一度は途絶された [カナファーニー 1974] とされるが、そののち様々な方法で占領下の芸術が形成され直し、難民と化した在外パレスチナ人の芸術と同時に、それらの顕在化が世界との対話を生み出したことにより、現在までに一つの重要な文化潮流としてパレスチナ芸術が認識されるに至っている。

パレスチナの社会構造と同様、その分野は複数の地域に区分される。すなわち、いわゆるパレスチナ域内 (ヨルダン川西岸およびガザ地区、区域内の難民キャンプ) の芸術、ゴラン高原やイスラエル国内に残留したパレスチナ人による芸術、アラブ世界に外在したパレスチナ難民による芸術、米国やヨーロッパにおけるパレスチナ芸術であり、世界的な広がりがあると言える。

国際政治に翻弄される中であっては、民衆とりわけ社会におけるマイノリティが公共圏を形成す

るための道程は容易ではない。先住市民が政治的承認を十分に得られず、公的な決定権から除外されている占領地、植民地主義下の社会構造の中では、現地の生き生きとした声が外部に向って発せられることすら、実は容易ではない。報道で切り取られる側面は往々にして事件性があるが、日本の一般的な市民にとって、植民地主義の占領下で起きている事件性のない日常生活そのものが、途方もない非日常である。そうした社会構造の差異とともに、人として共感しなにかの共通点を理解し、拾い上げられるべき多様な声を静かに語り継ぐ存在が、パレスチナ芸術であると言える。

また、パレスチナ芸術は徐々に展覧会等の機会を得つつあるとはいえ、美術館に所収されたり、映画化や書籍化されたりするような種類の芸術が多いとは言えない。従って正規の芸術教育を受けていない人が生み出すアートとしてのアール・ブリュット（アウトサイダー・アート）として壁画や社会絵画、地域演劇、伝承される民藝（民衆工芸・農民芸術とも呼ばれる）や音楽（民謡を含む）まで含めて、広範囲な形で展開されている芸術に着目する必要があるだろう。製作者の出身ではなく、題材としてパレスチナを扱っているものを含め、国際的に形成されつつある領域である。これらのことを総括すると、パレスチナ芸術はひとつの親密圏として成長著しい分野ではあるものの、公共圏の形成において支援を要する段階にあると分析できる。パレスチナ芸術を、他者の声たらしめる「公共圏」のなかに招き入れてその声に真摯に耳を傾けるとき、はじめて私たちは、新たな世界への対話的な営為を始めることができるだろう。

4 「異文化接触」としての芸術を織り込んだ対話的な教育設定

ここまでの章においてコロニアリズムの下で承認を奪われがちな「他者」としてのパレスチナをとらえ、彼らの声を細やかに描き出すための「厚い記述」を織りなし、なおかつ政治的他者の声をあえて政治の場に身体性を伴って可視化する「公共圏」を形成するという目的を持って、教育場面の中にいくつかの芸術作品を資料として扱うこととした経緯を上述してきた。

芸術の定義は、大まかに次のように要約されるのが一般的である。1 意図的な制作・デザインである、2 提示（presentation）され示されたものである、3 美的な意図を含むものである [カンバ 1997]。芸術の定義が改めて取りざたされる背景には、アートのすそ野が広がっている現状がある。

これらを踏まえて本章では、提示した芸術資料を概観分析しておくことにする。

4-1 パレスチナ芸術として扱った作品群

提示した芸術資料の領域は、演劇、映画（ドキュメンタリー・フィルム）、絵画（風刺画、児童画、社会画、将来画、壁画）、音楽（オーケストラ演奏、混合編成オーケストラの合宿練習、伝統楽器ウード、ヒップホップ）、伝統舞踊（ダブカ）、文学・詩、写真、映像（映画化されていないもの）、民藝（刺繍、民族衣装、焼き物、ガラス工芸品など）と多彩なものとなった。以下に概略する。

4-1-1 演劇

a 映画 DVD『アルナの子どもたち』…演劇を記録したフィルム

2003 年製作／84 分／イスラエル・パレスチナ合作

原題：Arna's Children

監督 ジュリアノ・メール・ハミス (Juliano Mer Khamis)

b 演劇『Suicide Note from Palestine』

2014 年初演 The Freedom Theatre

監督 Nabil Al-Raei, Micaela Miranda

<https://www.thefreedomtheatre.org/suicide-note-from-palestine/>

上記資料を説明するための情報資料

- ・書籍『被抑圧者の演劇』（アウグスト・ボアール著；里見実，佐伯隆幸，三橋修訳晶文社，1984.8）
- ・第二のノーベル平和賞「ライト・ライブリフッド賞」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ライト・ライブリフッド賞>
- ・Arna Mer-Khamis <https://www.rightlivelihoodaward.org/laureates/arna-mer-khamis/>
- ・The Freedom Theatre, Jenin <https://www.thefreedomtheatre.org/who-we-are/>

4-1-2 映画

c 映画 DVD『BBC 世界に衝撃を与えた日-6-～水晶の夜とイスラエル国の誕生～』

製作 NBC ユニバーサル・エンターテイメントジャパン

2003 年製作／イギリス 50 分

原題 DAYS THAT SHOOK THE WORLD # 6

http://pub.maruzen.co.jp/videosoft/days_shook_world/

d 映画 DVD『シリアの花嫁』

2004 年／イスラエル＝フランス＝ドイツ合作／97 分

原題：The Syrian Bride

監督 エラン・リクリス (Eran Riklis) (イスラエル)

<http://www.bitters.co.jp/hanayome/>

<https://youtu.be/rc12lPEbncA>

<https://older.minpaku.ac.jp/museum/event/fs/movies1005>

e 映画 DVD『ガーダ パレスチナの詩』

2005 年製作／106 分／日本

原題：Ghada Songs of Palestine

監督 古居みずえ (日本)

ガザに関する長期撮影のドキュメンタリー

関連資料

ガザ地区を重点的に支援したイタリア人活動家 Vittorio Arrigoni に関する

アルジャジーラのドキュメンタリー作品（2011）<https://youtu.be/jRVUhVKqmDU>

f 映画 DVD 『ミュンヘン』

2005 年製作／164 分／アメリカ

原題：Munich

監督 スティーブン・スピルバーグ（Steven Spielberg）（米国）

g 映画 DVD 『われらの友へ』

2009 年製作／27 分／パレスチナ&イスラエル

原題：Goodbye Bassem, you were a friend to us all.

監督 シャイ・ボラック（イスラエル）

制作 Popular Struggle Coordination Committee

<https://www.palestineposterproject.org/poster/goodbye-bassem>

h 映画 DVD 『ビリン・闘いの村 パレスチナの非暴力抵抗』

2007 年製作／61 分／日本

監督 佐藤レオ（日本）

配給：HMSAFilms

映画評 <http://www.jicl.jp/old/now/cinema/backnumber/20080728.html>

4-1-3 絵画（風刺画，児童画，社会画，将来画，壁画）

i 風刺画作家 Naji al-ALI

書籍『パレスチナに生まれて』…風刺画作品集

著者 ナージー・アル・アリー（Naji al-Ali）2010 年 いそっぷ社

原著 A Child in Palestine: The Cartoons of Naji al-Ali 2009 Verso Books

<https://www.versobooks.com/books/372-a-child-in-palestine>

Naji al-ALI の風刺画に関する資料

In Memoriam: Naji al-Ali, a Great Palestinian and Arab Cartoonist

制作 “Inside Arabia” 2018 年

<https://insidearabia.com/naji-al-ali-palestinian-arab-cartoonist/>

Naji al-Ali: Defiant Palestinian Cartoonist

制作 “Inside Arabia” 2019 年

<https://youtu.be/PWD2o-jOLRk>

作品集

Naji al-ALI 作品

<https://youtu.be/tF4GMuJvRTo>（Palestine Diary 制作）

<https://www.pinterest.jp/hedghaim/naji-al-ali-palestinian-cartoonist/>

紹介用ドキュメンタリー番組

Naji Al ALI An Artist With Vision 52 mins. روبا ذو فنان العلي ناجي

<https://youtu.be/Y31yUi4WVsU>

(Audience Award - Arab Screen Independent Film Festival 1999

Journalists Choice- Human Rights Film Festival Ramallah 2000.)

TeleSUR English での紹介番組

Rear Window - Naji al-Ali Conscience of Palestine

2017 年

<https://youtu.be/hy4OUle1Jsw>

TRT (トルコの公共放送) 番組

Palestinian cartoonist Naji al-Ali and his character 'Handala' with Ian Black

2017 年

<https://youtu.be/bA62i33GtBk>

Handala: A symbol of Palestinian defiance

2017 年

https://youtu.be/AwdlxTd_ebs

4-1-4 ストリートアート

j バンクシー (Banksy) の壁画

ガーディアン紙記事

Banksy at the West Bank barrier 2005 年

<https://www.theguardian.com/arts/pictures/0,,1543331,00.html>

TheNationalNews 記事 2020 年 6 月 10 日

Banksy in Palestine: A look at the street artist's work in Gaza and the West Bank (2020 年)

<https://www.thenationalnews.com/arts-culture/art/banksy-in-palestine-a-look-at-the-street-artist-s-work-in-gaza-and-the-west-bank-1.1031618>

Banksy In The West Bank https://youtu.be/umas99F_z6U

Banksy & The Rise of Outlaw Art - Palestine <https://youtu.be/1uQ790K2zFw>

Banksy's Street Art | HIGHLIGHTS <https://youtu.be/sSsjC-F9bwk>

Banksy at work on the Palestine/Israel separation wall

<https://youtu.be/996llk-04lA>

k バンクシー以外の壁画

APARTHEID ART: THE STORIES BEHIND 14 STRIKING PIECES OF GRAFFITI ON THE WEST BANK WALL (Amin, Bybahira 01 Apr 2019) Scene Arabia

<https://scenearabia.com/Culture/apartheid-art-palestine-israel-graffiti-separation-wall-west-ban>

ベツレヘムを中心とした分離壁に描かれた壁画の写真を多数紹介（写真）

説明のための追加資料

「ストリート・アート」（大山エンリコイサム＋荏開津広）『アートスケープ』解説

<https://artscape.jp/artword/index.php/> ストリート・アート

「美術解説 ストリート・アート；非認可の公共芸術作品」

<https://www.artpedia.asia/street-art/> 『アートベディア』解説

「ストリートアートのカラクリを暴く；なぜバンクシーの“作品”は億超えるのか？」『アマナト』記事 2019 05/20 アマナト（visual communication experts）

<https://amanatoh.jp/event/report/4978/>

記事「『パレスチナってどこ？』という人に見てほしい。バンクシーがガザ地区に残した作品 世界一眺めの悪いホテル」『男の隠れ家』記事 2020 年 10 月 27 日

<https://otokonokakurega.com/learn/secret-base/27819/>

4-1-5 音楽

音楽一般

- 1 書籍『バレンボイム / サイド 音楽と社会』バレンボイム，サイド著；アラ・グゼリミアン編；中野真紀子訳 みすず書房 2004 年
原 著 Parallels and Paradoxes: Explorations in Music and Society Daniel Barenboim and Edward W. Said; edited and with a preface by Ara Guzelimian Pantheon Books, 2002

- m 映画 DVD 『The Ramallah Concert Knowledge Is The Beginning』
制作 West-Eastern Divan Orchestra/Daniel Barenboim 2005 年
<https://www.medici.tv/en/documentaries/knowledge-is-the-beginning/>

ウェスト＝イースタン・ディヴァン・オーケストラ（West-Eastern Divan Orchestra）の練習のワークショップと演奏ツアーの様子を追ったドキュメンタリー

映画評 http://mariyoshihara.blogspot.com/2010/05/blog-post_31.html
朝日新聞等多くの日本の新聞に紹介されている（記事多数）

- o 映画 DVD 『自由と壁とヒップホップ』
2008 年製作／94 分／パレスチナ・アメリカ合作
原題：Slingshot Hip Hop
監督 ジャッキー・リーム・サッローム（Jackie Reem Salloum）
公式サイト http://www.cine.co.jp/slingshots_hiphop/

イスラエルの領内に取り残された形で住むパレスチナ人は、イスラエルの人口の約3割（当初・移民流入等によって現在の人口比率は2割）にのぼるが、行政や教育、就職など様々な困難に直面している。イスラエルの中で息をひそめるように生きる彼らがヒップホップで自己表現と連帯を試みるドキュメンタリー。

関連資料

DARG Team (Official Video) 作品

“Vittorio Arrigoni, Onadekom (Calling You)” 2011 年

<https://youtu.be/uq7J4TUdng>

One of Vittorio's favorite music that he was always singing in Gaza with children, young and elder.

p 演劇的要素のある音楽作品

“Horizon” Code Rouge feat Emel Mathlouthi (Génération Palestine)

制作 Code Rouge 2010 年 フランス

<https://youtu.be/dSB9ly7te6E>

民族音楽および民族舞踊

q 民族音楽 楽器ウード (العود al-ūd)

Palestinian Oud Joubran Trio at UN <https://youtu.be/IVzyyCycVlc>

LE TRIO JOUBRAN Laytana <https://youtu.be/cnY2t8RGtyg>

Le Trio Joubran at the Olympia 2 <https://youtu.be/ybw8amAu54I>

r 民族舞踊 ダブカ / ダブケ (Dabke)

Flash Mob, Dabke Style- Houston, TX 2017 <https://youtu.be/BT5uWATJGn0>

DANCING AROUND PALESTINE <https://youtu.be/6L4TxoLyMkc>

Jerusalem Dance Challenge from Palestine <https://youtu.be/kbuJ61WBdpo>

4-1-6 文学・詩

s マフムード・ダルウィーシュ (Darwish, Mahmoud) の作品…多数

Darwish 作品 + Dabke (舞踊) + Ouds (音楽) のコラボレーション作品

Le Trio Joubran at the Olympia https://youtu.be/Rlrzk8KID_E

t ガッサーン・カナファーニー (Kanafani, Ghassan Fayiz) の作品

書籍『ハイファに戻って / 太陽の男たち』ガッサーン・カナファーニー著；奴田原睦明訳
河出書房新社, 2009 年

日本上演作品『帽子と預言者』

<https://natalie.mu/stage/gallery/news/358601/1292591>

4-1-7 写真

- u 映画 DVD 『The Wall』の一部「Breaking the Silence」
監督 八木健次, 編集・助監督 佐藤レオ
2004 年製作 11 分 日本
イスラエル NGO Breaking the Silence による写真展の描写
<https://www.breakingthesilence.org.il/>
- v 書籍 “Activestills: Photography as Protest in Palestine/Israel”
著者 Vered Maimon, Shiraz Grinbaum (Edit)
出版 Pluto Press (December 15, 2016)
書評 By Maria Quinata, Art Books, The Brooklyn Rail
https://brooklynrail.org/2017/06/art_books/Activestills-Photography-as-Protest-in-PalestineIsrael
- w 映画 DVD 『壊された 5 つのカメラ』
2011 年製作／90 分／パレスチナ・イスラエル・フランス・オランダ合作
原題：5 Broken Cameras
監督 イマード・ブルナート (Emad Burnat) ガイ・ダビディ (Guy Davidi)
映画サイト <http://urayasu-doc.com/5cameras/index.html>
<https://vimeo.com/ondemand/uplinkcloud133/275960471>
- x 日本人写真家の活動（複数 / 主に佐々木陽子・拙稿筆者による）
「人を描けば心が動く」古居みずえ
<https://note.com/ngodear/n/nb7ce1fc4c7f1>

4-1-8 民藝

- y 刺繍 (Palestinian Embroidery) を施された民族衣装や作品（実物）の提示カフィーヤの表象するもの
解説本, 解説映像
“Palestinian Embroidery Motifs - A Treasury of Stitches 1850-1950”
Rimal Publications & Melisende Publishing, UK 2010 年出版
<https://youtu.be/6uGxGYZTXP4>
<https://youtu.be/bQ8pNMZtgEc>
<https://youtu.be/jGY6WaOfnR0>
マジダル織布 (Majdalawi Weaving 実物) の提示
Craft Traditions of Palestine
<https://web.archive.org/web/20080321111836/> <http://www.sunbula.org/crafttrad.shtml>

民藝を支援する国際運動
UNRWA Sulafa 「パレスチナ刺繍」<https://amal-f.jp/sulafa/>

Women in Hebron <https://womeninhebron.com/>

NPO「パレスチナ子どものキャンペーン」による国連開発計画（UNDP）協力の
「パレスチナ刺繍プロジェクト」<https://ccp-ngo.jp/>

z 工芸

ヘブロン…ガラス、焼き物絵皿、カフィーヤなどの製品（実物）

ナブルス…石鹸（ナブルスの文化遺産）（実物）

ベツレヘム…螺鈿パール（実物）、オリーブの木の彫刻品（実物）

ベツレヘム誕生教会内部にあるモザイク・タイルの画

モスクの表面に飾られたタイル（岩のドーム）

日本で紹介された番組のサイト「ベツレヘム・パール」

https://www.1101.com/n/s/co_bethlehem/2020-10-07.html

こうして提示された芸術（ストリートアート、民藝を含む）作品群は、一つの作品で複数の領域や共同性を描き出すものもあるし、単一の地域を深く描くものもある。

例えばガザ地区に特化して集中的に資料収集を重ねた古居みずえ氏が行った10年以上にわたる調査は、のちに映画（資料番号e）として公開されたが、作品のほとんどがガザ地区という極めて訪問が困難な場所の人々の日常生活での収録であるため、現地を知るうえでの、集約的な貴重な資料となっている。また、収録内容に農民の作業歌を多数含んでいて、音楽資料にもなっている。このように、ここで示した分類はあくまで代表的な要素であり、複数の芸術的要素が含まれているものも多い。

また一つの作品の内部にも複数の領域が描かれているか、あるいは複数の領域の人々が連帯して作品を作り上げているなど、多声を描き出すものも多い。それら複数の芸術作品が随時提示されながら、複層的な多声を形成することになる。それらが鑑賞者の中で立体的に結び付けられていく中で、徐々に、学習者自身の中に実態としての「パレスチナ」が感じ取られ、そこでの社会的現実が体感されていくように設計されている。

こうした多面性こそが、紛争地におけるそれぞれの現実であり、決して一つに集約されない声の総体である。解決や和解の道筋においてもこの多声性を聞き取っていかねばならないし、また同時に多様な声がどのような統一的な希求を示しているかも読み取っていかねばならない。個別の作品の詳細について解説する紙幅をここでは割かないものの、これらの作品がどのような順序で提示されたかを示すために、末尾にシラバスを添付資料として掲示した（資料1）。

4-2 作品群のカバー領域

提示した資料としての芸術を4-1で分類したが、これをさらに分野として分類したのが次の表1である。作品が主にどのパレスチナ社会・地域に重点を置いているかを分類して示した。

資料のカバー領域について、○はカバーする全体領域を示し、◎はとりわけ強調される領域を示している。表1の記の分布で分かるように、一つの作品の中にすでに複数の領域が含まれるものが多い。これらの作品を少しずつ紹介していく中で、徐々に全体が俯瞰できるようになっている。

表1 提示した資料作品がカバーする領域の分布

	資料 番号		パレスチ ナ地域内 ヨルダン 川西岸	パレスチ ナ地域内 ガザ地区	イスラエル 地域内パレ スチナ	イスラエ ル地域内 ユダヤ	アラブ地 域パレス チナ	ヨーロッ パ域内パ レスチナ	米国内パ レスチナ	アフリカや 日本など
演劇	a	アルナの子どもたち	○			○		○		
演劇	b	Suicide Note from Palestine	◎	○	○	○	○	◎	○	
映画	c	「BBC 世界に衝撃を与えた日6」	○	○	○	◎	○			
映画	d	「シリアの花嫁」			◎		○			
映画	e	「ガーダパレスチナの詩」		◎						○
映画	f	「ミュンヘン」			○	◎	○			
映画	g	「われらの友へ」	◎			○				
映画	h	「ピリン・闘いの村」	◎			○		○	○	○
風刺画	i	ナージー・アル・アリー (Najī al- Ali) の作品	◎	◎	◎	○	◎	○	○	
ストリート	k	壁画 (写真や映像で提示)	◎					○	○	
ストリート	j	バンクシーの壁画	◎	○				◎		
ストリート	h-2	ピリン村の野外アート	◎			○		○	○	
ストリート	r-2	ダブカを用いたフラッシュ・モブ						◎	◎	
音楽	l	「パレンボイム/サイード音楽と社会」	○			○	○	◎	◎	
音楽	m	「Knowledge Is The Beginning」	◎			◎		○		
音楽	o	映画「自由と壁とヒップホップ」	○	○	◎	○			○	
音楽	p	"Horizon"						◎		
音楽	q	伝統楽器 Oud - Le Trio Joubran	○	○	○			◎		
舞踊	r	伝統舞踊 ダブカ	◎	○			○	○	○	
舞踊	r-3	Jerusalem Dance Challenge from Palestin	○	○	○					○
文学	s	カナフアーニーの作品	○	○	○		○	◎	○	
文学	t	ダルヴィーシュの作品	○	○	○		◎	◎	○	
写真	u	Breaking the Silence(NPO) 写真展	○	○		◎				
写真	v	Activestills (NPO) による写真活動	○	○		◎				
写真	w	「壊された5つのカメラ」	◎							
写真	x	日本人写真家 (古居みずえ等)								◎
刺繍	y	刺繍作品	◎							
刺繍	y-2	国連などによる民衆支援運動の広がり	◎	◎			○	◎	○	○
刺繍	y-3	書籍等による刺繍モチーフの解説	◎	◎	◎	◎				
工芸	z	伝統的工業地域の作品	◎					○	○	

5 対話的鑑賞法を通した学生フィードバック

今回で行われた教育的試みは、研究者が現地資料を提示する際に、遠隔地の人と人をどのように「つなぐか」という課題を重視したコミュニケーション研究としての実験的な試行でもある。「つなぐ」先である学生自身の関心に沿うためには、効果的な資料の取捨選択が必要であった。さらに学生がICTを用いて教員に戻す芸術作品の鑑賞フィードバックは、学生が芸術を媒介にして他者を認めそれとの内省的対話を行う場であると同時に、学生と教員をも「つなぐ」場でもあった。

この章では対話的鑑賞がどのように行われたかを観察する一端として、学習者が記したフィードバックを分析してみたい。ただし本稿での提示は、全体的なうけとめを概観する目的のもとに、テキスト・データの類型にとどめている。

5-1 教育場面の概要

本稿で扱う教育場面は、全学向け共通教育学際科目「思想・文化と芸術」として提供される講座であり、「異文化との接触—対話するパレスチナ」と題したものである。「異文化との接触」の講座全体の目的は、「異文化との接触をテーマとして、現代社会がかかえる問題をてがかりに、学際的な視野から問題を掘り下げ、学生に『考える』場を提供する。たとえば、特定の文化圏の文化への他の文化の影響、映像などを通じた異文化の理解と考察、特定の文化圏の中での中心と周縁の関係性などを扱う」とされている。

その中の一つの講座「対話するパレスチナ」の概要は、次のとおりである。「パレスチナに移植されたユダヤ人問題としての構造的暴力を概観したうえで、暴力構造の解体として平和と共生を目指す実践に注目し、とりわけ文化芸術活動を中心に紹介し、その意味を分析する。文化芸術の諸活動を通して、国家の和解を補完する『人の和解』とは何かを考える。」さらに到達目標は「パレスチナやイスラエルに関して、歴史や政治の教科書にある国や年代としての知識ではなく、現地の人の感情や生活の目線での理解を構築できること。パレスチナとイスラエルが、固定化した紛争であるというより、コロニアリズム（入植に伴う諸問題）であるという構造的な問題をふまえたうえで、文化芸術作品を介して人々が対話する意義や可能性を理解すること。パレスチナで行われる様々な文化芸術活動の実例から、学生自身が現在あるいは将来関わる国際的な多様性の課題、地域内の共生の課題に対して、対話を重視した様々な方策のヒントを創造的に得られること。」となっている。

ポストコロニアルを模索する我々が現在と未来を考えるうえで、前提となるコロニアリズムの実態を、大文字の概念や数値記号としてではなく、できるだけ人々の目線でリアルに感じ取ることで、コロニアリズムを解体していくためにどのような取り組みが必要なのかを学習者が思考することを可能にしようと考えている。

受講生はアジアおよびヨーロッパ出身の学部留学生を含む1-4年生の全学学部対象で、前提とする知識や授業は必要とされておらず、興味関心のある学生が受講する「選択必修」科目の位置づけである。

当初は網羅的な説明を行う計画がなされていたが、新型コロナによる緊急事態宣言（2020年3月）に伴い遠隔授業化が急遽決まったことにより、資料提示の方法を含め対話的設営を組み立て直した結果、多様な声を可視化していくために、鑑賞者が資料の読み取りを能動的に行いながら学びを深めるという「芸術を基礎にした社会理解」を教育場面としてデザインすることとした。

芸術作品を主たる資料と定めたパレスチナ社会の講義という設定そのものは、政治問題を取り上げられやすい中東問題の理解において、絵画や音楽を多用して提供する講座という点でも、資料に依拠した読み取り能力の育成を求め、資料と学習者の対話を重視するという点でも、非常に斬新であるといえる。また、芸術鑑賞自体はさほど労力を要さないように見えるため、一見すると受講生にとって受け取りが容易であるが、内実は複雑な思考やコロニアリズムに関する発見と解釈が求められるため、個別の動機や着眼点に応じた学修を可能にするという構造になっている。一回 90 分が二コマ連続で提供され、毎週火曜日の午後、180 分の長時間にわたり、各種資料を提示しながら能動的鑑賞を設定していった。

5-2 鑑賞結果のフィードバックの仕組み

芸術作品を含めた資料は、授業内での提示を主眼としたが、一部の映画作品についてはフル視聴するために土曜の午後に追加的補講（希望者参加）を行なった。映像や画像の共有を多々扱ったが、画面上の提示には遠隔授業で用いられていた ZOOM のプラットフォームを用いた。授業で用いた作品や、アンケートの回答の統計分析は、学内のインターネット構造内に設置された教材提示サイトを用いて回収された。

授業後受講生は、Web Class というプラットフォームに設計されたアンケート形式の回答システムを用いて、感想を書き込む場所が作成され、学生はそこに無記名で回答を行った。併せて添付ファイルで教員に解釈内容を提出することもあった。この添付ファイル方式は受け手の負担が大きかったため、後期には、Web Class の課題提出機能を用いた。

課題のサイトには、課題文だけではなく、絵画や短い動画をアップロードすることが可能である。受講生はそれを閲覧および視聴したうえで、学生は芸術作品との対話的な作業を課題に従って行ったうえで回答を記入することになる。

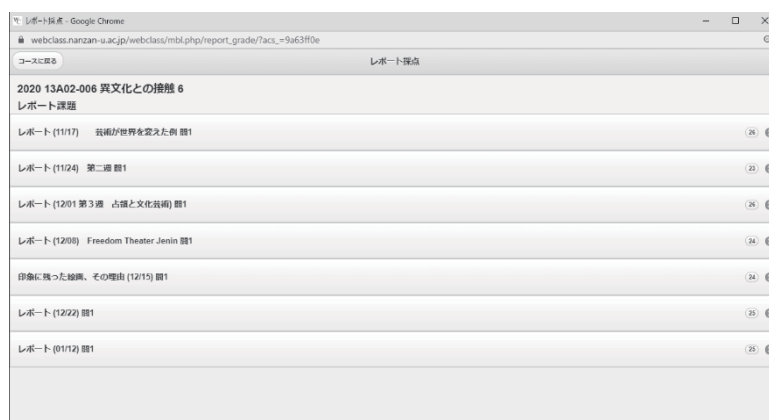


図 7 授業回ごとの課題提出用のオンライン窓口

教員にはこの図 7 が示される。この右側の矢印をクリックすることで、学生の提出物一覧表にアクセスし、そこからさらに図 8 の氏名をクリックすることによって、個別の解答を閲覧できる。そ

ここでは、採点を画面記入したり、コメント欄に返信を書き込めるようになっている。Web Class の回答の研究利用には同意書を併せて提出してもらった。

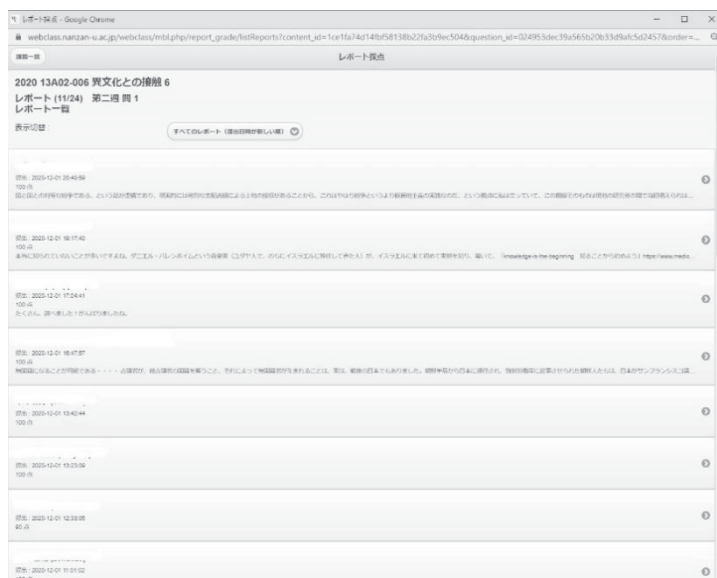


図8 学生の書き込み状況一覧

こうして得られた学生の鑑賞結果のフィードバックしてもらい、そこから芸術を用いた対話的鑑賞がどのような質の学びをみちびいたかについて再度分析する作業が、教員の側の効果測定の一部となる。こうしたテキスト情報と併せて、希望者を募り、数名に対してはPAC分析法を用いて学習を経た理解の質の変化についても計測した。PAC分析の結果については、それ自体だけで膨大な追加分析となるため、今回は対話型鑑賞法を用いた資料の提示とそのテキストデータの揭示にとどめ、別稿にて詳しく分析することとしたい。

以下、イタリック文字は学生が寄せたフィードバックの分類である。

5-3 フィードバック類型

5-3-1 類型Ⅰ 現地の暮らしに関する具体的な理解や発見

・この絵(図9)は、子どもが縄跳びのような遊びをしているが、その縄(鉄条網)によって足を切られてしまっている様子が描かれている。私はこの絵から、パレスチナの子どもたちが子どもらしい生活を奪われ、更に命までも脅かされているということを読み取った。鉄条網を回しているのは大人たちだと考えられる。見知らぬ大人たちによって、子どもたちは生まれた時から生活を抑圧され、時間が経ったとしても日々逃れようのない困難に直面している。本当ならば、学校に行って勉強したり友達と遊んだり出来るはずが、それさえ不可能な状況に置かれてしまっているのが事実だ。この絵は子どもたちが、本来持つべき自由が奪われ続け、更に紛争に巻き込まれてしまうことで、命の危機に晒されてしまうことを訴えているのだと感じた。



図9 Israeli West Bank Barrier is cutting off innocent Palestinian child's legs; by Naji al-Ali. [Dajani 2019; 115]

- ・先日のアートセラピーの講義を受けて、子どもたちは彼らなりに自分の夢や目標を持っていることを知った。彼らは彼らなりに感情を表したり、自分と向き合ったりすることで、未来を考えていた。パレスチナの子どもたちも、世界の子どもたちと同じように夢を持ち、その夢が抑圧や命の危機に晒されることで、断たれてしまうことはとても悲しいし、解決しなければならないことだと思う。ただでさえ今学校に通えなかったり、そのせいで学業を疎かにされてしまったりするのに、未来も保証されていないのはあってはならないことだ。
- ・イスラエルやパレスチナに住んでいる人たちにとって、当たり前については、私たちにとっては、あり得ないものであることを、ビデオを通して知ることができた。
- ・パレスチナでは占領や紛争、難民などネガティブな印象を持っていた。しかしながら、パレスチナの人々は音楽を通して、誇りを持って活動を行なっていることがわかった。私は勝手ながら、現地の子どもたちは日本の子どもたちに比べて、音楽と触れ合う機会が少ないのではないかと思い込んでいた。しかし、幼くても音楽と触れ合い、感性を高めることは出来るし、さらに音楽家として活動していることがわかった。講義では、主にクラシックの音楽を聴くことができたが、私は、パレスチナのポップスやロックなどの、現代的な音楽にも興味を持ったため、調べてみることにした。

- ・今まで私はパレスチナの子どもたちもことを理解したつもりでいたが、この絵（図10）を見て、まだまだ知らない困難と向き合っているのだと認識した。本来なら、子どもたちは大人たちに守られなければいけない立場であるのに、反対に危険な目に遭わされている。



図10 パレスチナの子どもの社会図「現在の図と将来の夢」[筆者撮影 2005年パレスチナ自治区]

「現在の図」には無力を示すように彼自身に手がなく、イスラエル兵が丘の上にいるが、「将来の夢」では、彼は笑っていて、多彩な色で家屋が塗られ樹が描かれている

- ・「兵士たちはひどい光景に慣れていき、疲れ切っていく、そしてレッドラインを越えてしまう」という（イスラエル兵の）言葉が、実体験として語られていて強烈な印象を受けた。これまではイスラエルの兵士がどのようなことを考えているのか、知りたいと思ってきたが、実際の言葉を聞いているのはつらかった。その後、子供たちが日常で起こっていることの再現として、壁に手をつき、身体検査をさせられるという遊びをしているところを写した写真の説明を聞いているときは子供たちがそのような光景に慣れていっていることを目の当たりにして涙が出てきた。兵士もどうしたらいいのか、わからなくて慣れていくんだ、最初はいじめに対応しようとしても、後から後から自分の支持を待っているパレスチナ人が現れて、テロリストかそうでないかという判断をしなければならないという重荷を押し付けられることで、どんどん疲れていって、最初は「すみません、あなたは通れません」だったのが、「あっちへ行け!」という脅しているとも混乱しているともとれる言葉にだんだんと変化していっているところが印象的だった。

- ・今回の講義を通して、（イスラエル）兵士側のかんじているしんどさ（状況に対して、何も変え

られないという無力感、向こうから来るパレスチナ人はテロリストで、自分を攻撃するかもしれないという脅え、瞬時にそれを判断しなければならず、テロリストでない人を傷つけることのストレスと、本当はテロリストかもしれない人を通しているかもしれない、という恐怖)を知ること、新たな視点を手に入れることができたと思う。それから、授業で紹介された写真や図書館で借りた写真集(『パレスチナ 瓦礫の中のこどもたち』広河隆一 p. 52, 53)を見ていて、イスラエル兵が逃げていく人の後ろで銃を構えたり、戦車の屋根の上に乗ったりしているときの表情が、硬い表情の人もいるが、いくつか微笑んでいるように見えるのが気になった。

- ・写真展で語る話し手 (Breaking the Scilence・退役イスラエル兵士) の言い回し (日本語訳ですが) すごく引き込まれるような話し方でした。文字で伝えることとは違う言葉の力を感じました。
- ・自分が授業で提示された絵や壁画の中で、すごく印象的だったのは少年が描いた絵の写真です。二人の人間と家が描かれています。そして、一人がもう一人の人間に対して、銃を突き付けているものです。僕がこの絵から最初にしたのは、この絵にある様子は自分の見たままのノンフィクションな絵を描いたのだと感じたのだと思いました。このような絵を描くことは日本の子どもたちでもあると思います。自分たちは子どもの時に、レンジャーやウルトラマンなどのヒーローもののアニメや漫画を見てきた人はすごく多いと思います。そのような子供たちが自由に絵を描いたときに、怪物や敵などに対して、武器を持って立ち向かう絵を描くことはあると思います。しかしそれは、自分の中に内在する明るい部分がある絵を書かせているのだと思います。一方で、この少年は、一見すると写真にある少年の暗い表情のように自分の中に内在する暗い部分がある絵を書かせているのだと感じてしまいます。しかし、その少年が実体験でこれから変わってほしいという希望や夢があるからこそこの絵を書こうと決意したのだと思います。そして、変わってほしいという思いの強さがその少年にその絵を書かせたのだと思います。
- ・たくさんの水に触れられることは贅沢だということで、これは普段水に恵まれている立場からするとあまり考えたことがなかった。きれいな水が手に入らずに苦しんでいる途上国の人々のことを知れば、自分たちがどれだけ感謝しなければならないかという思いには何度もさせられた。しかし水はあるものの、貯水タンクが壊されるかもしれないといった恐怖や焦りを抱えた人たちのことは初めて知ったため、海外でプールに入れることが贅沢だということを聞くと少し羞恥心のようなものが湧いた。

これらを見ると、芸術作品の鑑賞が統計数値の提示では得られなかったような内面的な推測や想像が行われやすいことや、羞恥や同情といった「関わりのある」感情をもとに思考を得られることがうかがえた。また軍事占領をしている側についてさえ、彼らの絶え間のない緊張や、それによって暴行が加速する過程について理解しようとしている。話をした元軍人 (Breaking the Scilence) の若者が語る映像作品については、軍事がいかに機械化しようと末端では必ず人が関わることを意味をとらえ、その内面や社会への影響を想像して考えている学生も多かった。

5-3-2 類型Ⅱ 問題の広域性、相互関係性、複雑性、国際性についての理解

- ・今までは、パレスチナ人とイスラエル人は全く和解をする気がなく、お互いの大事な物を奪い合

い傷つけあうことでそれぞれの欲望を満たす、権力を見せつけあっているのだと思っていた。しかしその解釈は異なり、和解して平和な生活を望む人が沢山いることに気付いた。

- ・授業の中で学んだ多くの活動には他の国の人々が関わっていることが多く、パレスチナは世界に対しても対話を試みているということを知ることが出来た。世界に対話を試みることは、パレスチナとイスラエルの対立の解消に大いに役立つと考えられる。なぜなら多くの人々がこの悲惨な状況を知ることによって、パレスチナの活動に共感し、協力しようとする人が増えるからである。
- ・対立している、という構図ばかり注目していると忘れがちだが、その中にはどちらにも位置していない人々がいることを覚えておかなければならないと思った。例えば、生まれてからずっと日本に暮らしているがもともとは朝鮮半島にいた人（この場合は日本の方にアイデンティティが強いけれど、朝鮮人としての他の人々との違いを感じているかもしれない）や、イスラエル人とパレスチナ人の間に生まれたハーフの人などである。国同士の関係が悪化するほど彼らの素直な意見というものは聞きづらく・言いづらくなるだろうし、どちらかに合わせて生きていくことを強いられるだろう。また、シオニズムに反対するイスラエル人、パレスチナでのデモに参加するイスラエル人がいるように、一国の中にもさまざまな考え方を持っている人がある。自国民と外国人、という風にはっきりと二つに分けられるものではないということを、もっと我々が自覚する必要があるように感じた。
- ・授業の中で学んだ多くの活動には他の国の人々が関わっていることが多く、パレスチナは世界に対しても対話を試みているということを知ることが出来た。
- ・これまでの授業でパレスチナ側の抵抗運動や支援団体については勉強してきたが、イスラエル側にもそのような団体があるということは知らなかったので、驚きました。イスラエル側にもパレスチナの支援をしようとしている人たちがいることは非常に喜ばしいことだと思います。そして、授業での話を聞く限りではパレスチナ側からの支援とは違った角度からの支援を送ることができるという利点もあり、心強いとも言えると思います。
- ・アウシュビッツ強制収容所の見学をしていたイスラエル人の高校の生徒たちが、ショックで動けなくなった後、次々にイスラエルの国旗を身にまとい、歩き始めたという写真（図11）をみて、アウシュビッツでの出来事がユダヤ人にとっても人道的にも凄惨な虐殺というのは間違いなく、旗を身にまとい歩くというのが彼らの鎮魂歌的な儀式なんだろうと思ったのですが、そこで国旗を使うのも、今は自分たちの国があるから大丈夫と考えるのも、イスラエルとパレスチナの現状を無視しているのではないかと感じてしまいました。（そこまで考えていないのかもしれないけど）イスラエルの歴史教育は大丈夫なのかと不安になります。自分たちもナチスのゲットーではありませんが、壁を作ってパレスチナ人たちを閉じ込めているという点では、同じようなことをしているのではと思います。



図 11 アウシュビッツを訪問するイスラエル人高校生と、身にまとう国旗 [筆者撮影
2006 年ポーランド]

- ・この授業の中でイスラエルとパレスチナの対立を見ることによってパレスチナの厳しい状況を知ることだけでなく、2つの勢力の対立には第三者の介入が必要になってくるということ、対話の手段として芸術が用いられるということも知ることが出来た。
- ・この授業を受講したばかりのころ、第一回や二回くらいまでしか進んでいなかった頃は、イスラエル側にも NGO や NPO があるとは思いませんでした。今日視聴した映像の中で、イスラエル人の若い男性がいくつかの写真の前でイスラエルにおいて徴兵される若い兵士たちの実情や、大人たちの真似をして無邪気に遊ぶ子供たちについて語っているものがありましたが、先生の解説や前情報がなかったら、パレスチナ人が自分たちが置かれている現状について講義しているかと勘違いしてしまうだろうと感じるほどの熱量で、驚きが大きかったです。このことから、今回の授業に限らずですが、共存することが問題なのではなく、どのように共存するのが問題だということを改めて感じました。
- ・特定の国際問題についてそれぞれの授業で考えるなかで共通して感じることは、現在と過去のつながりをどのように解釈して処理するかということはとても複雑で難しいということです。パレスチナ問題でも両者ともエルサレムという地に対して特別な思いや誇りを持っていて、パレスチナ人だけがその歴史を放棄せざるを得ないというのはおかしいことだと強く感じました。
- ・「肩を持つ 挟み撃ち」というイメージ図 (byNaji al-Ali 筆者注) が印象に残りました。トランプ政権になってイスラエルの入植が事実上認められたような状況をよく表していると思います。一見三つの勢力が協力しているように見えて、実際はアメリカとイスラエルが手を組んでパレスチナを追いつめている、そしてパレスチナがアメリカの今までとは一転した態度に驚いているような表情にも読み取れます。大統領選挙がどうなるかはまだわかりませんが、就任する大統領の

意向によって中東の情勢、主にパレスチナの未来が大きく変わってくるのだらうと思います。自分の国のことを自分たちで決められないつらさは計り知れません。

パレスチナ問題については、高校教育の段階でたびたび言及されていたということで、二枚舌外交などの用語や年代的な推移について知っている学生は多かったが、それが一体どういうことなのかについては授業を受けるまで実感として把握しきれていなかった学生もいたと思われる。少なくとも学生が、二国間対立と思っていたら次々と国際的な人や関与があることがわかり、「意外に国際問題だった」という言及もみられた。現地では、ボランティアをはじめ、ジャイカ（JICA）など日本からの支援機関も多く活動していて、日本人にとっても決して遠く無関係な問題ではないことが徐々に伝わっていったことに言及していた。オスロ合意の意味についてまとめた論文集を簡潔に紹介し、今後の国際政治等への学習の道筋を形成した。「現状がわかっても、解決方法がよくわからなくて悔しい」というコメントもまた、次なる学習への動機として高く評価できるものと思われる。

5-3-3 類型Ⅲ 社会構造に対する理解や発見

- ・「表現が奪われ、そして命が奪われる」という絵が印象に残った。私は創作をすることが趣味だが、日本ではどんな風に表現をしようが自由だ。しかし絵画の中では、パレスチナ人は少しでも誰かの意に反するようなことをすれば殺されてしまうことが描かれている。自由に表現のできない不自由さが窺えて、恐ろしいと感じた。また、口をふさがれたまま殺された男性の後ろで、（作者の分身である少年の・筆者注）ハンダラ君と女の子が文字で表現をしているというのも、いつかこうなったらほしいというナージーさんの希望が見て取れる。前回のアルナさん（の息子さん・筆者注）もそうだったが、ナージーさんも殺されている。自由な形で表現をしてもいずれ殺されてしまうという社会に身を置いていて、それでも自分の好きな形で表現しよう、社会に訴えていこうとする心持ちはとても勇気のあることだと思った。
- ・私が印象に残っているのはこの紛争批判の広告です。自分が撃った弾が自分に返ってくる、つまり紛争を続ける限り、必ず自分にも報復があるということを電柱などの柱に貼ることで辛辣に表しています。
- ・最も印象に残った物は、ナージー・アル・アリー（Najia al-Ali・筆者注）さんの本に書かれていた、オリーブの樹のように芽吹く希望の絵だ。この絵が印象に残った理由は、他の絵とは違い、ハンダラくんが両手を挙げて樹に駆け寄っている様に見える、また、パレスチナの希望が強く表されていると感じるからだ。他の絵と比べ、この絵は紛争地の悲惨さを訴えかけているのではなく、現在の紛争や他国からの圧力を乗り越えた先の希望を表している事が見て取れる。この絵に対する自分の解釈は、どんなに土地を奪われ、住んでいた場所を追いつめられようとも、オリーブの木のように折れずに粘り強く抵抗し続け、いつかきっとパレスチナを取り戻すという強い気持ちを表現しているのだと考える。オリーブの成長した樹ではなく、切り株を描いていることについて、次のように解釈する。切り株は元々生えていたオリーブの樹、つまり占領された土地を表わしている。そして、その切り株から国旗を持った手を生やすことで、パレスチナが生まれ変わって、新たな国としてこの先立派なオリーブの樹のように成長していくことを表現しているのではない

かと考える。このように、オリーブの樹から国旗を持った手を芽吹かせることで、パレスチナという国を取り戻すことに対して強い希望を持っていることを表しているのではないかと考える。

・ゲートが開くかどうか見守っている人権活動家たち、牢屋のような折の中で待つパレスチナの人々の写真（図12・筆者注）も非常に印象に残った。

イスラエル軍やパレスチナの人々にとってはそれが日常のようなものになっているのかもしれないが、はたから見れば異常なことであるし、聖地巡礼などを目的として来国した人々がこのような部分について知らないまま帰っていくという二面性のようなものがとても怖く感じた。最初の授業でパレスチナについて調べた際、観光サイトのページも検索で多く引っかった。私は最初、恥ずかしながらパレスチナ問題について詳しく知らなかったため、実際は観光できるような国なんだ、という印象を持った。もちろんそこも魅力だと思うが、外の世界から流れて来る観光客と一枚の壁を挟み、命がけで働きにパレスチナを出る人という対比がはっきりと感じられたし、知ることができて本当に良かったと思う。



図12 分離壁ゲート前に未明から並ぶパレスチナ労働者と、越境に伴う人権侵害を最小にとどめようとする国際NPOの活動風景 [筆者撮影 2015年パレスチナ自治区]

・芸術は鑑賞者を選ばない、という言葉に、美術館に飾られている主にヨーロッパ人が書いた絵画（高い値段がつけられている）は比較的見ることのできる人が限られる（＝経済的に余裕のある国の人が）、壁に描かれた壁画というのはその場所に行きさえすれば、だれも見ることができるといって優れた表現方法だと感じた。バンクシーの絵画がオークションで競り落とされた瞬間、シュレッダーにかけられてばらばらになったというニュースがあったが、少し攻撃的な表現になってしまうが、なんにでも値段がついて一部のお金持ちに芸術が独占される欧米文化への抵抗なのかもしれないと思った。

・今回の講義を受け一番印象に残ったことは、音楽と政治を切り離したいという考えだ。音楽は人々が自由に表現するものであり、統治者の思想に考えが偏る傾向にある政治が干渉すべきではな

いと考えるからである。音楽に限らず、芸術と呼ばれるものすべてにおいてこのことが言えると思うが、音楽などの芸術に政治が関わることで、本来表現したかったことが表現できなくなり、人々の表現の自由を奪うことに繋がると考える。

5-3-4 類型Ⅳ 鑑賞者自身との「関連性」の発見や行動指針の獲得

- ・ はっきり言って政治、経済、世界情勢を含めて考えては何もできないので、私個人として私が思う価値観のもとで考えてそして行動に移していこうと決意した。またそれに伴って、世界情勢だけみると主要国がイスラエル派なら私もイスラエル派かな、, と思いかねないので、考える材料としての情報の集め方が本当に大事であることも痛感した。
- ・ 何事も気になったら自分なりに可能な範囲で調べ、偏見を無くして真実を知ったうえでこの先どうするのか、選択できるようこれからの先の人生を送っていこうと考える。
- ・ 日本にも言えることで、戦争中に日本軍が他国に対して行ったひどい行いというのは、過去の忌まわしい歴史としてしまい込むのではなくて、きちんと教育に取り入れる必要があると感じている。在日朝鮮人の存在を意識している人が少ないのも、そういった方面での歴史教育が不十分であるからではないかと感じた。過去の歴史について学ぶことは、今後、日本が諸外国との関係を考えていくうえでも必要になってくるだろう。ただし、今の欧米がユダヤ人への罪の意識と同情から武力を提供し、パレスチナでの非人道的行為を間接的に支援してしまっているように、過去の罪にさいなまれ、(あるいは矛先が自分たちに向くことを恐れ、) アジア諸国に資金を提供して、彼らが少数民族や他の民族を攻撃するのを手助けする……なんてことにはならないように、気をつけていなければいけない。
- ・ 当事者同士が行って問題解決を図るものであり、この問題を取り巻く周辺国やアメリカ、西洋の国々はあくまで第三者的目線でその対話を見守るというように考えていた。しかし講義を重ねていくうちに、問題に対して受け身の姿勢で、流れてくる情報を飲み込むだけでは誤解が生じ、それがパレスチナ問題自体の終息を遅らせているのではないかということに気づいた。実際に私がこの授業を受講する以前と今とでは、この問題に対する考えや関心は全く異なり、より積極的なものとなっている。このように、現状を「知る」ことで自分なりに何かを感じ取り、考えることも対話の一つになりえるのではないだろうか。
- ・ 私はこの授業を通して、いかに自分が無知で無関心であるかを思い知った。パレスチナ問題は日本にとっても切り離せない問題である。現在でも、パレスチナでは土地の略奪や紛争などが頻発している。私達に何かできることはないのか。例えば教育制度、被害を受けた方への経済支援など、私達も議論していくべきだと改めて考えた。
- ・ 私はこの授業を受けてみて、今まで私が持っていたパレスチナに対する偏見は全て無くなったといっても過言ではないと思うほど、私のパレスチナに対しての思いが一新された。パレスチナではどこでも戦争が起きており、生きるか死ぬかの平和とは程遠い世界であると思っていた。だが芸術についての講義を聞いた際、講義内で出てきたような様々な種類の芸術が存在していて、非

常に驚かされた。音楽だけでなく絵画や壁画など、芸術の種類が多様であったことはたいへん興味深いことであった。美術館や博物館などに行こうと思ったことなどありもしなかった。このように私は、芸術とは疎遠な人生を歩んできた。日本国内での芸術でさえ、全くと言っていいほど興味がなかったのに、パレスチナの芸術についてなどもってのほかであり、知る由もなかった。また、これまで持っていた偏見も相まって、パレスチナに芸術があるとさえ思っていなかった。そんな中で受けた芸術についての講義は、私に不思議な感覚を与えたのと同時にこれまで持っていた偏見が誤っていたと教えてくれた。偏見なく現地の状況を見ることによって、これまで、私たちが見えなかったことが見えてくるのではないだろうか。現に、私もこの授業を受けていく中でパレスチナに対する偏見は無くなった。すると、パレスチナをこれまで思っていたものとは全く違う、別の物のように感じるようになった。同じものであるはずなのに、全く異なるものになった。偏見とは、こんなにも強力な力を持っているのだと改めて感じた。偏見を持たず見たパレスチナとは、戦争ばかり起きているわけではなく、芸術も充実していた。確かに、私たちが住む日本よりは不便なことなどたくさんあるだろう。だが、現地では現地にしかできない生活をし、芸術を楽しみ、戦争にも負けないよう抵抗したりして必死に生きている現地の人々のことを知ることが出来た。私はこのことが知れただけでもこの授業を受けて本当に良かったと考える。この授業を受けていなければ、この先の人生で私がパレスチナについて知る機会はおそらくなかっただろう。一生偏見を持ったまま過ごすことになっていたかもしれない。私は真実ではないものを真実と思ったまま終える人生よりも、たとえ真実を知って負の気持ちを背負うことになったとしても、真実を知って終える人生を送りたいと感じる。

学生の中には、当初から「毎日銃で撃ち合っているのに」などと実態とずれた認識を書き込む例も当初は少なからずあり、中には図13のような大学生や高校生といった同年代の学生の話聞いて「大学があるんだ、大学生もいるんだ、ということに驚いた」という声もあった。徐々に「暴力だけが現場ではない」ことや、「人々には長い間の平和な暮らしが守られている・守ろうとしている」ことが共有されていった。刺繍製品（手工芸民藝）の紹介に最も心を奪われたという学生も多く、美（工芸品や音楽）が生み出されていることは、現地に対する見解を大きく変化させる契機になったと思われる。



図 13 ベツレヘムにおける高校生のダブルカ演舞会の風景
[筆者撮影 2010 年パレスチナ自治区]

5-3-5 類型 V 対話, 芸術を通した対話の可能性への言及

- ・バレンボイムとサイドの音楽団に参加した若者達が、徐々に異なる文化を持つ人々と話をし合うことができるようになったように、音楽には人々の心を動かす力があることに改めて気づかされた。特に、彼らが作り上げた音楽団のような様々な異なる楽器や人々で構成される演奏形態においては、演奏者や指揮者が共に演奏することから一体感を作り出す事ができる。音楽は、演奏する側の心に一体感を作り、複数の人々で一つの曲を演奏し聴き手に届けることを意識させ、また、その演奏を聴く側もその一体感のある演奏に心を動かされるものだと思う。今回の講義では特に、前者の演奏する側の人々が音楽を通して人々の心が変化していったことが見て取れた。紛争でこれまで交わることのなかったパレスチナやイスラエルなどの若者の音楽家が共に同じ場所で演奏や対話を行うことが可能になっていたことが分かった。また、紛争により共に過ごすことが難しかった人々にとって、この二人が開催した音楽団はかけがえのない機会になったのではないかと考える。
- ・ラマラ・コンサートにはイスラエルやパレスチナ以外の国も参加をしているが、それは純粋に素晴らしいことだと感じた。境遇や置かれている状況が違い、そこには縦の関係があるように思うが、一人一人が国籍関係なく自分の気持ちや考えを持って参加し、それが一つの音楽を形作るということはとても不思議なことに思えた。全体が現状を超えた共存という目的を持っているが個々人の考え方が排除されているというわけではなく、映像の中でも参加者たちが意見を交わしあっている場面がみられた。主催者の意図を伝えることだけでなく、それぞれの意思があるからこそこれだけの音楽が作られ、成功したのだと思った。
- ・様々な芸術作品を閲覧したが、どれも強いメッセージ性があり、印象に残るものばかりであった。その中でもナージ・アル・アリー (Naji al-Ali・筆者注) の作品群は、パレスチナの惨状をアー

トによって描き表すことによって悲惨さが明確に目に見える形で表現されており、非常に印象に残った。これらの作品を目にすることによって、芸術は大きな力を持っているように感じるようになった。

- ・ バフチンの対話主義についてのサイトを読んで、「対話」とは必ずしも平和的に、同調して、最終的にお互いに譲歩した案を出さなければいけない、ということではなく、自分と異なるものに対してコミュニケーションをしようと試みることであることが分かった。特に印象的だったのが、「他者を理解することは、他者と同一化することではないからである。他者はつねに外部に存在する—あるいは内部にあっても異質な存在価値を主張しているはず」という一説である。友人や好きな作品、アーティストなど自分の好きな者に関しても、すべてを肯定するのではなく、これは受け入れられない、という部分があってもいいということを改めて感じた。
- ・ いろいろな国籍の人が集まってできたコンサートの合宿のように、コミュニケーションをもうける機会というものが必要だと思った。自分にとって耳心地のいいものではない話を、冷静に聞くことができる人はきっと少ない。バフチンは、対話を調整・変形する人間の意識のことを「『私』活動と『私の中の私でないもの』すべてとの絶えざる交換」と表現したが、異質なものを排除するのではなく、耳を傾けつづけることは、本当に難しいことだと思う。国の政治をとっても、自分にとって都合が悪い報道をフェイクニュースだと言ったり、不祥事を問い詰める記者に対して回りくどい表現で逃れようとしたり、批判的な意見を素直に受け止められるリーダーというのは少ないんじゃないかと感じた。私自身も、戦時中に朝鮮半島から日本に連れてこられたひとびとを取り扱ったニュースは、なんとなく避けてきたように思う。それは、自分には関係がないという気持ちと、聞いていて楽しいものではない意見を避けたい、という気持ちからだったのではないか。
- ・ 紛争状態にあるパレスチナの状況下では、直接的な対話は困難であることは事実である。それでも、パレスチナの人々は芸術を通して対話を試みていることを授業で学んだ。授業ではアートや音楽、劇など様々な芸術作品を閲覧したが、どれも強いメッセージ性があり、印象に残るものばかりであった。
- ・ 暴力を使わない文化的な抵抗をする人々と、その抵抗によって生み出された作品を知った世界の人々との間で対話がなされている。
- ・ 対話というと、会話や言葉が大前提として必要な印象をはじめに抱いたが、今期の講義をとって可能性は他にも見出せると思った。それは、対話はお互いが強く思った上での意思の疎通が為されたときにもかなうと思ったからだ。提出課題のときにも考える機会があったが、芸術は言葉による概念の構築を超えた部分でも感覚的に伝わるものがあると思えたので、大きな可能性であるし、無視してはいけないものだと考えさせられた。
- ・ 日本と朝鮮半島、中国、周辺諸国における戦時中、戦後の問題で言えば、彼らの話を聞き、同情することもできるが実際に同じ体験をしていなければ本当の意味での共感も理解もしえないわけ

で、ただひどいことをしてしまったのでお金を払って弁償します、というのではなくて、彼らの存在を意識しつつもあくまで自分が育ってきた背景で培われた意見をいい、対話をする中で受け入れたいと思ったものは受け入れ、受け入れられないと思ったことは頭の中には置いておくが、あくまで自分自身の考えとは異なる、ということを買っていてもいいのではないかと思えた。

対話論として特に紹介したのがバフチンであった。彼の対話論は、多くの芸術解釈に応用されてきた点と、「それぞれの声がいつにならずとも場に可視化されることの意義」（多声）を認めている点、アーレントの言う「公共圏」に合致したこともあり、講義資料として複数の紹介文を提示しておいた（桑野 2002, 2008, 2011, 2020, 田島 2014, 朴ら 2007, Here comes Everybody 2006, 池田 2017）。掲示された論文は授業で詳しく読み込まなかったにもかかわらず、掲示資料へのアクセス数は学生数とほぼ同数となっており、多くの学生が一度は目を通してくれたことがわかったうえ、個別に詳しく読み込んで解釈の参考にした学生もいた。最終的には授業の副題とした「対話するパレスチナ」という意味が、芸術作品を通すことで、十分に伝えられたように思われる。

5-4 補足として；ボイコット運動への批判的解説

講義の最終段階において、文化芸術に関する現地の追加的情報として「ボイコット、投資撤収、制裁」運動（Boycott, Divestment, and Sanctions：頭文字をとって BDS または BDS 運動などと呼ばれることが多い）に関して、文化芸術の拒否や交流の途絶という点から若干の批判的評価を紹介した。

当初はアラブ連合から提唱された経済的な一次制裁から開始されたこの運動は、二次制裁、三次制裁と拡大するにつれ逆に経済制裁の効果が薄れ、アラブ連合により失敗が宣言された政策であるとされる。しかしその後、当初の経済的失策を補うかのようにして文化芸術交流活動を排斥のターゲットにした運動が勃興し、イスラエルに関係する人や組織のみならず、彼らと交流した文化交流団体や、学術や芸術に関係する個人をさえ制裁対象とする「文化芸術のボイコット」へと変質してきているのが現状である。文化芸術の担い手の敵視は、学術芸術それ自体の敵視にも通底するうえ、多くの排斥運動が子ども、女性、芸術作品や展示の場といった、非軍事かつ最弱者を襲撃する傾向が強いことも深刻である。学術・芸術の排斥を主張する中には、日本における留学生受け入れを停止する旨を主張するものもある。敵とみなした人々の文化芸術やそれとの鑑賞や交流を否定し排除することの深刻さについては一定の否定的評価とその評価に到る理由を説明する必要があると思われる。

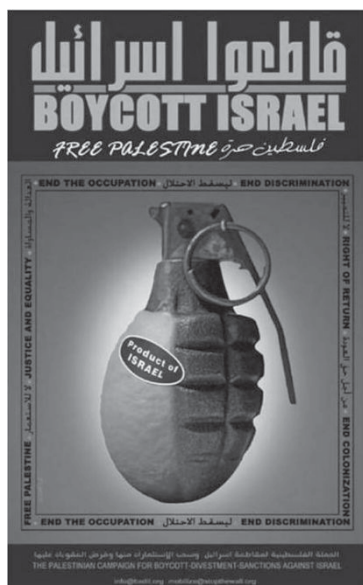


図 14 果物と手榴弾を暗示する
BDS ポスター [筆者撮影
2015 年パレスチナ自治区]

関係性を断ち切る運動とは別に、つながりを求める運動も多様に存在する。芸術の紹介に加えて、民藝としての刺繍製品やガラス工芸やオリーブ等の農業製品を用いた加工製品（石鹸等）のフェア・トレード・ビジネスから社会の適正化や持続可能性を図る動きが世界的に形成されつつあることを、同時に概観した。

つながる動きと、断ち切る動き、この両方のせめぎあいが存在する点もまた、紛争後の和解過程における重要な一部である。

6 結語

本稿では、概念の定義や、年号順の事件、地理情報などといった従来多く扱われてきた資料に加えて、芸術を一つの重要な資料として扱い、それとの対話的鑑賞を通じ、能動的な理解や解釈の動きを可能にする教育設計を試みた教育事例を取り上げ、そこでの理論的枠組みと実践内容の分析、および成果についての分類を行った。

国際間コミュニケーションは、同質性の予定調和ではなく、異質な他者の可視化という設計部分に最も重要な点がある。その外観や風景に加え、そこで生きる人々が発信するメッセージを芸術を軸にして解説した今回の教育設計は、デジタル媒体や写真・音楽に慣れた Z 世代と呼ばれる若い学習者にとって、意外なほど訴求力のある資料として受けとめられたようであった。粘り強く文芸・絵画等を通して発信するパレスチナの芸術群の中に対話の意思を読み取った学生の中には、これま

で自分が忌避してきた韓国の人々と勇気をもって対話しようという刺激を得たと述べる者もいた。こうした自国と周辺国の対話に関する省察は、教育設計した側にとっては想定外の発展的な部分であったといえる。パレスチナ芸術を通し、民族や宗教の共存という課題や、対話へ向かう真摯な動きなど、地域を超えた普遍性のある課題や取り組みを読み取り、自らの行動へと反映させていくという回路は、類似の社会問題に関心を持つ若い学生たちにとって発展的な要素である。

概念として習得しがちな「植民地主義／コロニアリズム」であるが、その実態は複合的な思想と実態経済で織りなされるものであり、現場におけるその実態としての「入植」や「占領」は、決して概念ではなく過酷ともいえる現実である。イスラエルの入植の実相は、持続可能性を継承してきた伝統的な農業や住居の在り方、伝統的な現地のパレスチナ社会生活全般を大きく変化させている。水問題や土地問題が副次的に引き起こす環境問題をはじめ、排他的かつ差別的な政策と植民地主義の思想的影響は、資本主義の先鋭化、軍事占領の拡大、染料の過程における非人道性の問題といった、日本社会もかつて経験したコロニアリズムの負の側面を如実に想起させるものでもある。日本がアジアとの間で経験したコロニアリズムは今なお影響が完全に払しょくされたとは言い難く、ポストコロニアリズムの過程にある。その点で、日本社会と周辺諸国の関係性への省察を行った学生が複数いたことは評価に値する。

長期化していくパレスチナ問題（シオニズム問題）に関し、国際関係の中で刻々と切り取られて流れてくる単発的な報道を、長い歴史と土地に根差した文化生活の営みの文脈の中で読み解く力の育成において、遠隔授業での講義を通して十分に指導できたかどうかについては、心もとない部分もあるが、現地に住む人々の目線の一端を確実に獲得できた部分を足掛かりに、今後新たに出会うであろう様々な角度からの資料を読み解く基礎力を形成したことを期待している。そしてそれこそが、資料と彼らが関係を切り結んだことの本質的な意義である。芸術作品を用いたことによって、顔が見えず、声が聞こえないとされがちな遠隔地の「他者」の姿を、少しでも学生に接近させることができたという実感はあるものの、今回は効果測定分析については踏み込まずあえて類型のテキスト表示にとどめている。効果測定についてはさらに精緻化し、学生の学びの質に関する効果測定を実施分析する必要があるだろう。

他者が立ち現れ声を発する「公共圏の形成」を、芸術を媒介にして成し遂げるという構想は、幸いにして2020年7月から挑戦的研究（萌芽）「芸術との対話を経た公共圏の形成過程に関する実証研究」として日本学術振興会（JSPS）より科学研究費基金20K20686の助成を受けることとなり、それを受けて、本稿で扱った教育設計を応用発展させる形で2021年度からは「対話する東アジア」と題した講座を設定し、主に東アジアの芸術作品を媒介とした地域間対話および戦後和解を扱うこととなった。今なお果たされきっていない日本と東アジアの戦後和解については、政府主導の「国家の和解」に加えて今後一層「人の和解」が重要になっていくことが予想されるが、その一方で、「語り部」とされる人々の高齢化により物語を継承する手段が徐々に途絶えていく現実をふまえると、残された記録の中でもとりわけ「芸術作品」の持つ意義は、今後ますます高まると考えられる。英国のテイト・ギャラリー式の教育アプローチでは、芸術鑑賞用のためのワークシートを作成し、博物館や美術館と学校が共同で教育プログラムを行っている[山木ら2014]。概念を伝えるための地図情報や数値、年代等の事実といった従来の教育で多く用いられてきた資料と、本稿で分析したような芸術作品等の資料を組み合わせ提示し、学習者がそれらを解釈することによって、学習者の内的な経験と能動的に呼応した形で「物語」が創造的に立ち上がるプロセスを可能にしていくことが、資料と解釈者の間の対話を、いっそう深めることになるだろう。ICTツールの活用が活発化す

る現在、教室にいながらにして海外の博物館および美術館等の資料に接したり、他国の人々と意見交換を行うことができるようになるなど、以前とは比べ物にならないほど国際教育交流における物理的な障壁は低くなっている。コロナ禍による制約は依然として持続しているものの、それゆえ他者の声を聴く場やそこでの対話の重要性は増すばかりである。人と人のつながりを促進する ICT の利用においては、美術館博物館の展示物や、文化芸術作品といった「もの」が語る声を聞き取る形を通し、資料や技術の活用を模索する研究を発展させることによって、物理的および時間的に遠隔になった人と人が出合いなおす場面での、豊かな語りと対話を生む芸術の意義と可能性について実証研究を重ねたい。

謝辞

本小論は挑戦的研究（萌芽）「芸術との対話を経た公共圏の形成過程に関する実証研究」として日本学術振興会（JSPS）より科学研究費基金 20K20686 の助成を受けました。記して深く感謝いたします。

参考文献

【邦文】

- アレナス、アメリア 1998『なぜ、これがアートなの?』（福のり子訳）淡交社。
- アレント、ハンナ 1973『人間の条件』志水速雄訳 中央公論社。
- ギアーツ、クリフォード 1987「厚い記述—文化の解釈学的理論をめざして」『文化の解釈学Ⅰ』（吉田禎吾ほか訳）岩波書店。
- ハーバマス、ユルゲン『公共性の構造転換』細谷貞雄訳 未来社。
- Here comes Everybody 2006「バフチンにおける対話概念について：桑野隆先生講演会まとめ」<http://finnegans-tavern.com/hce/ft/2006/04/23221015.html>
- 池田光穂 2017「対話主義」（バフチン、ミハエル）
https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/2017_dialogism.html
- カナファーニー、ガッサーン 1974「占領下パレスチナにおける抵抗文学」（奴田原睦明・高良留美子訳）、野間宏編『現代アラブ文学選』創樹社 340-392。
<https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000001269189-00>
- カンバ、リチャード 1997「芸術作品を定義するための控え目な提案」（川上明孝 訳）『金沢美術工芸大学紀要』（開学 50 周年記念特集号 41）、131-137。
- 桑野 隆 2002『バフチン—“対話”そして“解放の笑い”』岩波書店。
- 桑野 隆 2008「「ともに」「さまざまな」声を出す」『日本質的心理学研究』7、6-20。
http://www.jaqp.jp/JJQPfull/JJQP_07_2008_006-020_full.pdf
- 桑野 隆 2011『バフチン』（平凡社新書）平凡社。
- 桑野 隆 2020『増補 バフチン』（平凡社ライブラリー）平凡社。
- 文部科学省 初等中等教育局教育課程課 2011a『生きる力』
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/_icsFiles/afieldfile/2011/07/26/1234786_1.pdf
- 文部科学省 初等中等教育局教育課程課 2011b「学習指導要領 生きる力」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/1304378.htm
- 文部科学省 2019「小学校学習指導要領 平成 29 年告示 解説・社会編」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfi

- le/2019/03/18/1387017_003.pdf
- 森 啓輔 2020「対話的鑑賞法」Web マガジン『Art Scape』Artwords® (アートワード)
<https://artscape.jp/> 対話的鑑賞法
- 西牟田哲哉 2000「『ビゴの絵』と日清戦争前夜」『歴史地理教育』617, 52-55.
- 岡本 泰 2007「歴史教育教材としての風刺画の研究」『上越社会研究』22, 51-60.
- 桶川 泰 2011「親密性・親密圏をめぐる定義の検討：無定義用語としての親密性・親密圏の可能性」『鶴山論叢』11, 23-34.
- 大森照夫, 佐島群巳, 次山信男, 藤岡信勝, 谷川彰英編 1993『新訂 社会科教育指導用語辞典』教育出版.
- 朴 東燮 (Park Dong Seop), 茂呂雄二 2007「バフチンの対話性概念による社会心理研究の拡張」『実験社会心理学研究』46(2), 146-161, 2007.
<https://ci.nii.ac.jp/naid/130000303322>
- サイード, エドワード・W. 2005『ペンと剣』ちくま学芸文庫.
- 齋藤純一 2008『政治と複数性：民主的な複数性に向けて』岩波書店.
- 佐々木陽子 2020「文化芸術を用いたパレスチナ第3次インティファダ：闘いの村ビリンが創造した公共圏と対話」『日本の科学者』55(2), 5-14.
- 佐々木陽子 2021「対話するパレスチナー芸術が創出する公共圏」『南山大学外国人留学生別科紀要』4, 1-19.
- 田島充士 2014「異質さに向き合うためのダイアログ：バフチン論からのメッセージ」『心理学ワールド』(64), 9-12, 日本心理学会.
<https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2017/10/64-9-12.pdf>
- 田中曉龍 2010「小・中・高・大にわたる歴史教育と課題」『歴史と地理』637, 24-30.
- 飛奈裕美 2009「エルサレムにおけるイスラエル占領政策とパレスチナ人の戦術—住居建設の事例から」『イスラーム世界研究』2(2) 131-151.
- 上野行一 2012「対話による美術鑑賞教育の日本における受容について」『帝京科学大学紀要』8, 79-86.
- 山本朝彦・井上由佳・塚田美紀 2014「英国テイト・ギャラリーの美術教育への貢献—バーバル・アイズの事例研究を通して見えてくるもの」『鳴門教育大学研究紀要』(29) 82-90.

【英文】

- al-Ali, Naji 2009 *A Child in Palestine: The Cartoons of Naji al-Ali* Verso Books.
- Dajani, Nabil 2019 *The Media in Lebanon: Fragmentation and Conflict in the Middle East*, I. B. Tauris Press.
- Meyer, Henri 1898 En Chine - Le Gateau des Rois... et des Empereurs [China - the Cake of Kings... and of Emperors] Le Petit Journal, 16th January.
<https://digital.library.cornell.edu/catalog/ss:3293809>
- United Nations 1996 Map showing Israeli settlements established in the Territories occupied in June 1967, Map No. 3070 Rev. 17, Document Sources: Department of Public Information (DPI).
<https://www.un.org/unispal/document/auto-insert-204082/>

インターネット資料はすべて2021年2月15日閲覧確認

資料 授業シラバス『対話するパレスチナ』15回計画＋使用資料

- 1 はじめに
イスラエルの歴史的概観 — ナチス・ドイツによるホロコーストから建国、入植拡大の現在まで
パレスチナの地理変遷
文化芸術への着目—小説『太陽の男たち』（ガッサーン・カナファアーニー）が象徴する忘却と死
- 2 シオニズムと植民地主義
UN資料から考える入植と占領、資源（水資源、労働資源、天然資源）の意味
ナクバ、土地の日が意味するもの
分離独立という幻想と、選択的接収の実態（越境労働者の現状 Jerusalem- Bethlehem）
- 3 構造的暴力と分離壁
インティファダ（ジェニン、ベツレヘム）
オスロ合意の実態—直接的暴力から構造的暴力へのシフト
- 4 パレスチナ難民
難民の発生、難民キャンプ、国連等の支援（UNRWA資料）
難民キャンプにおける芸術活動—絵画教育、演劇教育、アート全般教育へ
アルナ（1993年ライト・ライブリッド賞）の業績、ジェニン難民キャンプとは
- 5 演劇と表現 ジェニン自由劇場の初期活動
映画『アルナの子どもたち』の解説つき視聴
- 6 演劇と表現 ジェニン自由劇場の現在の発展
ジェニン自由劇場の発展と国際評価
- 7 漫画、風刺画
世界的な風刺画に関する状況
書籍『パレスチナに生まれて』（ナージー・アル・アリー著）の解説
- 8 壁画
分離壁の現状、ベルリン・エルサレム・ベツレヘムを比較した調査研究成果から
子どもの絵画の紹介と解説
壁画、アールブリュットの意義、メキシコ壁画と北川民次、バンクシーの解説
- 9 刺繍、民芸
民芸とは・・・民藝運動と柳宗悦、農民芸術
パレスチナ刺繍の特徴と歴史—1800年代のコレクション解説、実物展示
フェアトレッドから国際支援へ—Women in Hebronの事例から
- 10 女性と社会運動
インティファダにおける女性
イスラエルにおける女性運動—Women in Black
パレスチナ未成年者への人権侵害と母親の運動
- 11 対話の始まり、その可能性と限界
パレンボイムとサイードによる「ラマラ・コンサート」の意義
「占領下の経済成長という幻想」（論文）に見る、占領下の共生の限界
オスロ合意再考
- 12 イスラエルとパレスチナの共同による反占領運動
映画DVD『自由と壁とヒップホップ』に見るイスラエル国内のパレスチナ人の分布と状況
イスラエルのキブツ、NPO、非暴力運動の広がり
 - 文化芸術を用いた対話（Nebe Shalom）<https://wasns.org/>
 - 文化芸術を用いた歴史教育（Zochrot=ナクバを記憶する）<https://zochrot.org/>
 - パレスチナ人への家屋損壊に反対するイスラエル市民運動（The Israeli Committee Against House Demolitions : ICAHD）
<https://icahd.org/>
 - パレスチナ人への人権侵害に対する法的支援団体（Addameer Prisoner Support & Human Rights Association）
<http://www.addameer.org/>
- 13 国際的な連帯の形成
国際機関とNPOの支援状況（ユネスコ、UNRWA、EAPPI、JICAなどの事例紹介）
第三次インティファダ（文化的抵抗）の意義
補足として・・・BDS（イスラエルボイコット）についての批判的紹介
- 14 ビリン村—デモを介した国際的な対話と抵抗
ビリン村の概観、金曜デモの国際的広がり
ビリン村をテーマにした複数の映画の解説
『さらばわが友』（シャイ・ボラック監督）
『ビリン—闘いの村』（佐藤レオ監督）
『壊された5つのカメラ』
ビリン村を強制接収したイスラエル軍に対しイスラエル最高裁判決の返還命令
- 15 まとめ — 在外難民の文化芸術とポストコロニアリズムの協働性
詩人マフムード・ダルウィーシュの国際的評価、サイードとの共同作業
民俗舞踊 Dabke(ダブケ/ダブカ)
民俗音楽 ウード (العود al-ūd)

- 1
映画DVD『BBC 世界に衝撃を与えた日-6-水晶の夜とイスラエル国の誕生~』
論文 ガッサーン・カナファニー著「占領下パレスチナにおける抵抗文学」(奴田原睦明,高良留美子訳)『現代アラブ文学選』(野間宏編集) <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000001269189-00>
書籍『ハイファに戻って/太陽の男たち』ガッサーン・カナファニー著
- 2
書籍『イスラエルに関する十の神話』(イラン・パベ著 法政大学出版局)
書籍 Zionism and Territory: The Socio-Territorial Dimensions of Zionist Politics <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA00574648>
- 3
書籍『パレスチナの歴史』(奈良本英佑著 明石書店)
書籍『パレスチナ、ジェニンの人々は語る—難民キャンプ、イスラエル軍侵攻の爪痕』(土井 敏邦著 岩波ブックレット)
映画DVD『シリアの花嫁』(ゴラン高原のイスラエル占領に伴い、無国籍にされたパレスチナ人の話です)
映画DVD『ガーダ パレスチナの詩』(ガザ地区の生活実態がわかる映画です)
映画DVD『ミュンヘン』(ミュンヘン五輪にまつわる暗殺について)
- 4
第二のノーベル平和賞「ライト・ライブリフッド賞」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/ライト・ライブリフッド賞>
Arna Mer-Khamis <https://www.rightlivelivelihoodaward.org/laureates/arna-mer-khamis/>
- 5
映画DVD『アルナの子どもたち』
- 6
The Freedom Theatre, Jenin <https://www.thefreedomtheatre.org/who-we-are/>
書籍『被抑圧者の演劇』(アウグスト・ボアール 著, 里見 実 翻訳)
演劇『Suicide Note from Palestine』(The Freedom Theatre)
- 7
書籍『パレスチナに生まれて』(ナージー・アル・アリー著) (原著 A Child in Palestine: The Cartoons of Naji al-Ali)
- 8
書籍『The Wall-Fragmenting the Palestinian Fabric in Jerusalem』
映画DVD『イグジット・スルー・ザ・ギフトショップ』
映画DVD『Banksy Does New York』
- 9
UNRWA Sulafa「文化的な豊かさが魅力 パレスチナ刺繍」 <https://amal-f.jp/sulafa/>
- 11
書籍『パレンボイム/サイド 音楽と社会』
(原著 Parallels and Paradoxes: Explorations in Music and Society)
映画DVD『The Ramallah Concert』(ラマラ・コンサート)
(DVD Knowledge Is The Beginning Documentary Including The Ramallah Concert) (West-Eastern Divan Orchestra/ Daniel Barenboim)
冊子『オスロ合意から20年—パレスチナ/イスラエルの変容と課題』NIHUイスラーム地域研究東京大学拠点中東パレスチナ研究班
http://www.i.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/nihu/publications/mers09/mers09_fulltext.pdf
- 12
書籍『Refusing to be Enemies: Palestinian and Israeli Nonviolent Resistance to the Israeli Occupation』Ithaca Press (2011)
<https://www.politics-prose.com/book/9780863723421>
DVD『The Wall』から抜粋 イスラエルNGO Breaking the Silence のテルアビブでの写真展
<https://www.breakingthesilence.org.il/>
書籍『沈黙を破る—元イスラエル軍将兵が語る“占領”』(土井敏邦著 岩波書店)
DVD『Zochrot the Nakba』(ナクバを記憶する)
映画DVD『自由と壁とヒップホップ』
- 13
EAPPI <https://www.oikoumene.org/what-we-do/eappi>
- 14
映画DVD『さらばわが友』(原題 Goodbye Bassem) <https://www.palestineposterproject.org/poster/goodbye-bassem>
映画DVD『ピリナー闘いの村』 <http://www.jicl.jp/old/now/cinema/backnumber/20080728.html>
- 15
書籍『ペンと剣』(エドワード・サイド)
書籍『分かれ道—ユダヤ性とシオニズム批判』(ジュディス・バトラー著,2019)
書籍『エルサレムのアイヒマン』ハンナ・アーレト
映像 Le Trio Joubran at the Olympia - Dabke [HQ] https://youtu.be/Rlrzk8KID_E
映像 Palestinian Oud Joubran Trio at UN <https://youtu.be/lVzyyCycVlc>
https://youtu.be/qyWg11F_O3k

Palestine Arts for Dialogue; Dialogical Appreciation by ICT

Yoko SASAKI

Abstract

How can art act as an intercultural mediator for dialogue? In order to scrutinize this question, the author presented Palestine art works and artistic intervention projects in the intercultural education so as to highlight its cultural, political, economic, social, and transformational impacts. The author encouraged students to consider themselves as agents of the communication process promoting dialogue. This educational approach underlines the significance of arts and media as a tool of understanding, mediation, and communication across and beyond cultures.